

# 日本政治小説の翻訳と清末小説形式に関する考察

——啓蒙の二つのかたち<sup>\*</sup>——

森 岡 優 紀

## はじめに

近代的な小説観が知識人の間に徐々に浸透しはじめ、小説をただ単に民衆を教化するにとどまらず社会変革の道具として用いようという考えを持つに至ったのは清末からである。それ以前、社会の支配階級である士大夫階級は全く別の小説観を持っていた。士大夫階級が有していた伝統的な小説観について、前野直彬氏は「明清の小説論における二つの極点」において、清初に編纂された乾隆帝勅撰「四庫提要」子部小説家類の言説を取り上げ、これを士大夫階級の正統的な小説論の代表であるとみなすことが可能であると述べている<sup>1)</sup>。現代の感覚からいうと、『四庫提要』子部に分類された小説とは零碎な短文を集めたもので、小説というジャンルに入るものではない。そして逆に小説に一番近いと思われる「三国演義」「水滸伝」のような通俗白話小説はそこに入られていないのである。また同時に白話通俗小説ばかりではなく、文言で書かれた「聊齋志異」などの作品も採られていない。では巷に存在して後世に伝えられてきた膨大な書物の中から、どのような採択基準で子部小説家類を編纂したのであろうか。これについて「四庫提要」には読者に与える三つの効用、つまり「勸戒を寓し、見聞を広め、考証に資する」を基準にしたと書かれている。「勸戒を寓し」とは民衆が過去に起った事例から行動の指針を得ることであり、「見聞を広める」とは世間で起こる様々な出来事を知るためであり、「考証に資する」とは歴史の欠を補うことを意味している。これら三つの効用が有効に働くためにはある一つの前提を基にしている。それは小説に描かれた物語が事実に基づいているという前提である。民衆が過去の事例を自己の行動指針とするためにはその物語が出鱈目に作られたものであってはならず、また見聞を広めるための材料となる物語も事実無根であってはならない。歴史の考証に関しては言うまでもない。そのため、この前提からすると明らかに事実から逸脱をしていると思われる白話小説などは論外であり、採択の範囲には入れられていないのである。これはまた「其の雅順に近き者」を選び、「猥鄙荒誕」で「徒らに耳目を乱す者」は収めないとする採択基準に基づいたものである。

では、なぜ「其の雅順に近き者」を尊び、「猥鄙荒誕」「徒らに耳目を乱す者」を退けるのか。それは「其の雅順に近き者」とは支配階級が認める価値観に合致している者であり、「猥鄙荒誕」なる者とは秩序を乱す者だからである。小説が価値を有するためには空想によって作られた秩序

\* 本稿の作成に当たり、京都大学人文科学研究所「中国社会文化研究班」の参加者の方々から有益なご意見を頂きました。ここに記して深く感謝します。並びに、立命館大学東アジア研究会の皆さまにも感謝します。

を乱す出鱈目の物語ではあってはならない、むしろ体制を補強していく役割を担うことによってその効用を果たすことが可能となる物語でなければならない。つまり、士大夫の伝統的な小説観は主に体制秩序の維持と補強を目的とする価値観から発しているのである。

しかし、清末の知識人たちは初めて小説を社会改革の手段としようと考えた。ただ、それは彼らが小説を自らの価値観を表現するための形式としてふさわしいとみなしたからではなく、彼らが小説に注目した理由は小説形式の通俗性に着目したからであった。

康有為の「日本書目志識語」には次のようにある。<sup>2)</sup>

四曰幼学小説。吾問上海点石者曰。「何書宜售也」曰「書，経不如八股，八股不如小説。」宋開此体，通於俚俗，故天下読小説者最多也。啓童蒙知識，引之以正道，俾其歛欣樂読，莫小説若也。

（四に曰く幼学小説。吾上海点石なる者に問いて曰く。「何の書を宜しく售るべきか」曰く「書，経は八股に如かず，八股は小説に如かず。」宋に此体を開き，俚俗に通じ，故に天下に小説を読む者最も多きなり。童蒙の知識を啓き，之を正道を以て引き，其れを歛欣して樂読させるは，小説に若くなきなり。）

同年に書かれた「本館附印説部縁起」においても次のように述べている。<sup>3)</sup>

古代の人々が文字を使用し始めるとまず書，経，子，集の四つが生まれたが，これらは全て理を説いた文章であり，事実を記述した文章ではない。人と事実について書かれたものを史という。この史のうちで事実に基づいていないものを稗史という。この史と稗史の二者は事実を記載したものであるが，同じ事実を記述した本でも伝わりやすいものと伝わりにくいものがある。

その原因は具体的に五つある。一つめは文字である。通常に使われる文字で書かれていると伝わりやすい。二つめは言葉である。言葉がわかりやすい口語で書かれていると伝わりやすい。三つめは叙述の方法。洗練された簡潔な言い回しよりも紆余曲折に富む語り口は，目の前に見るような身近さをもっており，読者はより親しみを感じる。四つ目は日常的に慣れた物事，経験した物事は民の心を捕らえやすい傾向にある。五つ目は人生とは思いに任せないものであるので，事実をそのまま書いても人の心を捉えるとは限らない。むしろ事実よりも虚構における勧善懲悪のような単純な道理が却て人々の欲望をとらえるのである。この五つの条件から伝わりにくいのは国史であり，伝わりやすいものは稗史小説であると述べている。このように，ここでは小説の持つ感化力の多くは形式に由来していることが述べられているのである。

清末における小説を「啓蒙」の道具とする文学効用論は，一般的に近代小説の芸術的な観点からは未だ伝統的な価値意識を抜け出していないと論じられることが多かった。しかし，この小説効用論は史の補強でしかなかった小説を文学における周縁たる位置から中心へと一気に押し上げる役割において重要な意味を有しているのみならず，この効用に目をつけたからこそ小説形式を清末の知識人に意識させるきっかけとなったのである。そのため，中国における小説の形式に対する意識化は政治性と密接しており，また小説形式における近代化もその政治性とは切り離せない。<sup>4)</sup>

ただ，現実には小説の啓蒙力について説いた清末の知識人たちが一般的に触れていたのは四書

五経であり、長い伝統をもつ文言で書かれた詩であった。たとえ彼らが白話小説をこっそりと読んでいたとしても自らの思いを小説に託すなどという芸当は思いも寄らない発想であり、また未だ経験したことの無いことであった。そのため、梁啓超をはじめとする清末の知識人が実際に自らの政治思想をどのように小説化するのかという問題に直面すると、それは前例のない困難な道程となったのである。そして彼らの試行錯誤、悪戦苦闘は創作からではなく、まず日本政治小説の受容と翻訳から始まった。

小論では一八九八年『清議報』に掲載された二編の日本政治小説「佳人奇遇」と「経国美談」の翻訳を取り上げる。この二編の小説は非常に早い時期に、梁啓超、そして梁啓超と非常に親しい間柄にあった羅普によって翻訳された。一八九八年以前に翻訳された西洋近代小説で体裁が整っているものはほとんど皆無に等しい。『申報』一八七二年四月十五日から十八日に掲載された「談瀛小録」（スイフト「ガリバー旅行記」）、『申報』一八七二年四月二十二日に掲載された「一睡七十年」（ワシントン・アーヴィング「リップ・ヴァン・ウィンクル」）などの西洋の小説が断片的に新聞雑誌に掲載されていたが、これらの小説が人々の注意を惹くことはほとんどなかった。日本を含む外国小説が中国の知識人の注意を惹くのは西洋文明の優越性に目を向けるようになる日清戦争の敗戦を待たなければならぬ<sup>5)</sup>。

このような状況のなかで、「佳人奇遇」と「経国美談」の翻訳は新たな小説の可能性を開く試みへと向けた第一歩だったと言えるだろう。梁啓超は『清議報』に掲載されたこの二編の翻訳を通して自らの小説に対する認識を深め、一九〇二年に『新小説』の発刊に至ったのである。その意味においても、この二編の翻訳は中国の近代小説が発達していく上で非常に重要な礎を築いたのであった。そしてこれは内容上のみならず、小説の形式においても同様のことがいえる。

ただ、この時期の小説に関する言説は小説の啓蒙的意義を説いたものが大半であり、具体的に小説の内容、形式自体について系統的に言及した文献はほとんど見当たらない。清末研究で著名な陳平原氏は清末の文芸評論について「これは一塊の金塊ではなく、一山の砂金である。砂の中から金をとりだすことはできるが、それには多大な労力がある」と述べている<sup>6)</sup>。特に小説形式についての言及は先に挙げた「本館附印説部縁起」の範囲を出るものは皆無に等しい。しかし、それは清末の知識人たちが小説の内容や形式に関して決して無関心であったということではない。彼らの実際の翻訳からはその時代に合った小説、及び小説形式を模索して、新たな可能性を開こうとする試みの跡がみられる。ただ、彼らは自らの実践を断片的に書き綴るに留まり、文芸評論として系統的に理論化する力がまだ未熟なだけなのである。そのため、彼らの小説に対する認識を探るには文芸評論だけではなく、実際の試みに目を向けなくてはならない。

そこで、小論においてはまず翻訳がどのように訳されているのかに着目する。中国語翻訳の「佳人奇遇」と「経国美談」は日本語の原書と比較するとどのようなかたちで翻訳されているのだろうか。これらについて、直訳であるか意訳か、文言か白話か、文体の特徴、改変箇所、小説形式の特徴、日本語原書との異同はあるかなど具体的に分析を進める。これらの翻訳の特徴はまさに清末知識人の試行錯誤の跡であり、彼らが小説の担うべき啓蒙的役割をどのように実作に反映したかをそこから見ることができる。

## 第二節 「佳人奇遇」

柴四郎こと東海散士によって執筆された『佳人之奇遇』は明治十八年から明治三十年の十二年間にわたり初編から八編十六冊まで刊行された。<sup>7)</sup>柴四郎は嘉永五年（一八五二年）に代々会津藩士である家系に四男として生まれた。慶応三年に十六歳で大政奉還を迎え、鳥羽伏見の役に出陣し、合津征伐に遭う。かの白虎隊でも有名な合津征伐は悲惨を極め、まだ年若い柴四郎はこの事件から深い影響を受けた。『佳人之奇遇』においても、亡国の佳人である紅蓮が東海散士に向かって日本は亡国ではなく新興国ではないかと言うと、散士は合津征伐に関わる自らの経歴について次のように語っている。

遂ニ大政ヲ奉還セラレ、繼テ我公亦職ヲ失ヒ京師ヲ退クニ至ル。而シテ当時世人却テ我ヲ責ムルニ覇府ヲ保庇シ維新ノ帝業ヲ妨グルモノトナシ、朝廷我ヲ罪スルニ禍心ヲ包蔵シテ帝命ニ抗スルモノトナシ、哀願途絶ヘ愁訴計窮リ、錦旗東征大軍我境ヲ圧ス。（略）其年八月廿二日勝軍山ノ敗報到リ士民呼テ曰ク、敵軍飛来城下ニ迫ルト。時ニ散士三兄一弟アリ。慈母小弟ヲ一僕ニ託シ涙ヲ揮テ遠ク去ラシム。蓋シ深意ノ存スル有リ。大兄ハ軍ヲ監シテ越之後州ニ戦ヒ、転戦シテ城下ニ傷キ、仲兄ハ野州ニ戦没シ、小兄ハ兵ヲ督シテ境上ニ拒グ。（略）散士時ニ尚ホ幼ナリ、猶ホ一矢ヲ敵ニ放テ死セント欲シ、跪テ家人ニ訣別シ、覚ヘズ顔色凄愴タリ。慈母叱シテ曰ク、汝幼ナリト雖モ武門ノ子ナリ、能ク一敵將ヲ斬リテ潔ク尸ヲ戦場ニ暴シ家声ヲ損スコト勿レト。散士奮テ蹶起ス。（略）家人神前ニ聚リ、香ヲ焼キ祖先ノ靈ニ告ゲテ曰ク、事已ニ此ニ至ル亦言フベキナシ、苟モ余生ヲ乱離ノ間ニ偷テ悔ヒンヨリ、寧口潔ク国家ニ殉ジ、死シテ父兄ヲシテ顧慮ノ累ヲ絶タシメ、以テ三百年来養生セシ士風ヲ表明スル真ニ此時ニ存ス。只ダ恨ムラクハ我公多年ノ孤忠空ク水泡ニ属シ反賊ノ臭名ヲ負フヲ。是レ終天ノ憾ミ海枯レ山翻ルモ消シ難シト。妹時ニ五歳ナリ。慈母謂テ曰ク、敵兵已ニ我家ニ迫ル、今汝ト泉下ニ趣キ以テ父兄ヲ待タントス、聞ク地下途暗シト、今我一族皆ナ亡ブ、人ノ又香火ヲ供スルナシ、汝相抱持シテ其途ニ迷離スル勿レト。（東海散士『佳人之奇遇』第二卷）

合津征伐によって、母は五歳の妹を道連れに自害し、散士は生き延びて捕虜となり、明治元年末まで拘禁され、釈放後は下北半島の極北の地に移封される。その後、各地の私塾を点々として英語などの学問を苦学して修め、上京をして書生などをしながら生計を立てた。明治十年二月に西南の役が起ると、散士はこれにも参加。この時、先輩の山川將軍の懇意である谷干城將軍の知遇を得る。富川良平などの知遇も得て、明治十二年にアメリカ留学が実現する。アメリカではハーバード大学などで政治経済学を専攻し、ペンシルバニア大学でも経済学を勉強し、財政の学士号を得る。明治十八年の帰国後に、病を得て熱海で静養する期間に閑を得て、「佳人之奇遇」の執筆を始めた。

「佳人之奇遇」の第一編は、主人公である東海散士がアメリカのフラデルフィアの独立閣を訪

れる場面から始まる。散士はアメリカ滞在中から既に政治小説を執筆しようという心算があり、明治十二年から明治十八年までのアメリカ滞在中に小説の初めの部分に関する腹案を練ったらしい。そのため、「佳人之奇遇」は東海散士がアメリカ滞在時期の明治十五年に照準を合わせて始まっている。主人公東海散士も作者である柴四郎の分身といってよい存在であり、フィクションでありながら、かなりの部分に自らの経歴を入れて創作されており、主人公の形象は自己の政治思想や価値観を投影した自己像となっている。<sup>8)</sup>

「佳人之奇遇」において、東海散士は凄惨を極めた合津藩降伏後に自害をせずに生き延びた経緯について、主将に「空シク死シテ名ヲ滅センヨリハ、恥ヲ忍ビ生ヲ全フシテ一旦外患アルノ日誓テ神州ノ為メニ生命ヲ鋒鏑ニ委シ、而シテ是非正邪ヲ死後ニ定メンニハ若カズト。（『佳人之奇遇』第二巻）」と諭されたからだと書いている。

幽囚数歳俗吏ニ罵ラレ獄卒ニ辱メラレ、後又極北ノ荒野ニ放謫セラレ、悲風蕭殺牧馬夜嘶キ、飢テ山下ニ蕨薇ヲ掘リ窮シテ海浜ニ海藻ヲ拾ヒ、以テ余生ヲ保チ迺遭竄斥猶ホ悔ヒザル所以ノモノハ、他日我帝国ノ為メニ鞠躬命ヲ致シ、往年ノ志ヲ天下後世ニ伸べ、死者ニ泉下ニ謝セント欲スルノミ。今ヤ外人禍心ヲ包蔵シ神州ヲ蔑視シ、清ハ猥ニ自ラ尊大我ヲ輕ジテ隣交ニ信ナク、俄獨ハ勢威ヲ頼テ驕傲シ、英佛ハ狡智ニ老ケテ蕩逸レ、我ニ飲マシムルニ美酒ヲ以テシ我ニ贈ルニ翠羽ヲ以テス。其酒其羽往往鳩毒ノ製スル所、我士民之ヲ受ケテ而シテ未ダ疑ハズ。所謂此レ毒藥ヲ甘餐シ猛獸ノ爪牙ニ戯ルモオナリ。只ダ恐ル邦ノ為メニ悔ヲ取ランコトヲ。且ツ彼口ニ仁義ヲ誦シテ而シテ桀虜ノ行アリ。（略）亜細亜北部ハ疆俄ノ為メニ並セラレ、南方印度ハ英王ノ臣妾トナリ、安南ハ佛国ニ隷属シ、土耳其清国モ亦萎微既に已ニ亡滅ノ運ニ傾メリ。（『佳人之奇遇』第二巻）

合津藩討伐後に、散士が嘗めた苦労は人並みのものではなかったらしい。「後又極北ノ荒野ニ放謫セラレ、悲風蕭殺牧馬夜嘶キ、飢テ山下ニ蕨薇ヲ掘リ窮シテ海浜ニ海藻ヲ拾ヒ」という記述は、この小説特有の華麗なレトリックとも受け取られそうであるが、実際に柴四郎は下北半島に移封された時に海藻や蕨で飢えを凌ぐ極貧生活をおくっている<sup>9)</sup>。東海散士が恥を忍んでこのような困窮生活に耐えて生き延びたのは「他日我帝国ノ為メニ鞠躬命ヲ致シ、往年ノ志ヲ天下後世ニ伸べ、死者ニ泉下ニ謝セント欲スルノミ」とあり、ひとえに国に報いるためである。つまり、彼は合津藩への封建的忠義をそのまま国への忠義と置き換え、弱小国を仮借なく侵略支配していく列強国への抵抗へと転化しているのである。そしてこの物語が始まる明治十五年はまさに西欧列強が弱小国を侵略し、植民地化へと乗り出した年でもあった。前田愛は「明治歴史文学の原像」において「『佳人之奇遇』は、非ヨーロッパ的世界の視点から記述されたものひとつの世界史の可能性を開示したのである。」と述べている<sup>10)</sup>。明治初年において、急速に普及した歴史観はヨーロッパの啓蒙主義から生み出された進歩史観であり、これは非欧米諸国がヨーロッパの文明を目標として追いつくことが文明進歩への道であるという文明史観であった。これらの思想を体現した書物はギゾーの『ヨーロッパ文明史』の翻訳『西洋開化史』から始まり、福沢諭吉の『世界国尽』や内田正雄の『輿地理略』などがある。しかし、明治十年代に西欧列強の植民地主義があらわになると、西欧を文明国とみなしその他の地域を非文明とみなす論理は、弱小国を侵略してい

くための強者の論理に過ぎないことが露呈し始め、このヨーロッパ優位主義からなる文明観に綻びが見え始める。そのため、明治十年前後からヨーロッパ文明への逆説的な認識が浸透し始める<sup>11)</sup>。東海散士の『佳人之奇遇』は、「福沢諭吉から加藤弘之にいたる啓蒙思想家たちの心をとらえていた文明史観、進歩史観にたいするもっともスケールの大きい告発の書」となったのである<sup>12)</sup>。

主人公の東海散士がフィラデルフィアの独立閣で奇遇した二人の佳人も、西欧列強の侵略に喘ぐ弱小国の女丈夫である。紅蓮はアイルランド独立運動の志士であり、幽蘭はスペインのドン・カルロス党員である。紅蓮はアイルランドの富豪の娘であり、父はイギリスのアイルランド圧迫に抵抗する独立運動に参加して入獄され死亡している。彼女も父の遺志を引き継いでアイルランド独立運動の領袖であるパーネル女史と通じて、アイルランドの独立運動を支援している。幽蘭の父もスペインのドン・カルロス党領袖であり、ドン・カルロス党が起こした第二次カルリスタ戦争が失敗に終わった後、幽蘭はアメリカの亡命を余儀なくされる<sup>13)</sup>。二人は亡国の徒であり、また列強から侵略を受けた弱小国の辛酸を嘗め尽くしていた。東海散士も戊辰戦争を経験しており、心情としては合津藩亡国の遺臣である。これに明朝の名将瞿氏の部下を先祖にもつ中国人の范卿が加わり、四人は西欧列強の侵略の危機に晒される弱小国の遺臣として親交を結ぶ。

このような歴史の変革期において、「佳人之奇遇」には日本のみならず弱小国が世界史のなかで置かれている位置をダイナミックに捉える視線が貫かれており、それは同じく西欧列強侵略の危機に晒されていた中国知識人にとっても共感すべき文明史観であった。梁啓超が戊戌政変失敗後に日本亡命途中で本書を目にして大いに感じる所があったのも偶然ではない。この小説には彼自身がまさに身に迫って感じている危機が書かれていたのである。

中国訳「佳人奇遇」は一八九八年に『清議報』創刊号から九号と二十三号を除いた三十五号まで毎号連載された。ただ、実際に梁啓超自身がこの本を翻訳したかどうかについては未だに疑問が残る問題である<sup>14)</sup>。確かなことは梁啓超がこの小説に深く感銘を受け、それを中国語に翻訳したいと考えた事であり、また当時の梁啓超の日本語レベルがどの程度であったか定かではないが、仮に彼自身が一人で全て翻訳したのではなかったとしてもこの翻訳に深く関わった事は確かである<sup>15)</sup>。

明治初期の日本人知識人の漢文の教養は高く、日本語原書の「佳人之奇遇」は東海散士の深い漢文の教養に支えられた漢文訓読調文体で書かれている。ナショナリズムの思想を盛り込んだリズム感のある漢文調の文章は多くの日本青年の心を揺すぶり、この「佳人之奇遇」に引用されている漢詩等は日本人学生の間で朗読されていたという。中国人にとってもこのような漢文訓読体文章は当時一般的であった戯作調和文より断然理解しやすかったと思われる。中国語訳においてこの漢文体の文章が原文の語順を入れ替えただけでそのままのかたちで訳されており、見事な名訳となっている。

時ニ金烏既ニ西岳ニ沈ミ、新月樹ニ在リ、夜色朦朧タリ。少焉アリテ皓彩庭ヲ照シ、清光戸ニ入ル。幽蘭静ニ起チ窓ヲ開テ曰ク、光景画クガ如ク、郎君光臨ス。欄外風清ク花香人ヲ襲フ。良夜空ク度リ難ク、盛会再ビ期ス可カラズ。徒ニ相對泣スル亦何ノ益アランヤ。氣ヲ鼓シ勇ヲ奮ヒ歌舞吟詠自ラ寛ニスベシト。（東海散士『佳人之奇遇』第二巻）

時金烏既沈。新月在樹。夜色朦朧。少焉有皓彩照庭。清光入戸。幽蘭靜起開窓曰。光景如画。郎君幸臨。欄外風清。花香襲人。良夜難以空度。盛會不可再期。徒相對而泣。亦何益之有哉。今宜鼓氣奮勇。歌舞吟詠。以為自寬之時也。（『清議報』第六冊）

（時に金烏既に沈み、新月樹に在り。夜色朦朧たり。少焉ありて皓彩庭を照し、清光戸に入る。幽蘭靜に起ち窓を開て曰く、光景画くが如く、郎君幸臨す。欄外風清く花香人を襲ふ。良夜空く度り難く、盛會再び期す可からず。徒に相對泣する亦何の益あらんや。今宜しく氣を鼓し勇を奮ひ歌舞吟詠、以為へらく自ら寛にする時なるべしと。）

第三節の「経国美談」の意識と比較してみると一目瞭然であるが、この訳は基本的には原作者の意図を正確に擷んだ直訳を目指しているがよくわかる。日本の「佳人之奇遇」に挿入された漢詩なども一部を省略する以外はほとんどそのまま掲載されている。明治十年代の日本知識人は漢文の素養が深く、梁啓超などの清末知識人は違和感がなくそれを受け入れたのであろう。

このように梁啓超の翻訳は基本的には原著の風格を残した文言による直訳であるが、一部意識的に改変削除した箇所が存在している。改変箇所にはについて許常安氏は「『清議報』登載の『佳人奇遇』について——特にその改削」で一覧表を作成して詳細に分析している。それによると、大きく「文学的技巧に依る改削」と「政治思想的理由に依る改削」の二つに分かれる。一つめの「文学的技巧に依る改削」は量的にも多くなく、この改削にはあまり大きな意味はない。例えば割注の処理、煩雑である部分の省略、補足などであり、現在の翻訳からするとこのような訳し方は厳密ではないと言えるが、当時の翻訳水準からするとほとんど注意を引かないようなものだったと考えられる。これに対し、「政治思想的理由に依る改削」は梁啓超がかなり意図的に行ったものである。先述の論文によると、「政治思想的理由に依る改削」を「(1)反清復明の志士范卿に対する改削」、「(2)君主を戮すを忌む」、「(3)中国を三分する興亜策に反対」、「(4)日本の国土拡張策に反対」、「(5)その他」の五つに分けている。ここから分かるのは、翻訳する際に梁啓超が自分の政治思想とは異なる部分を改変削除している事である。

更に、この改削の箇所で「(1) 反清復明の志士范卿に対する改削」についてはより興味深い指摘がある。<sup>17)</sup> 反清復明の志士范卿は東海散士と佳人の会話に深い感銘を受け、その会話に割り込み、自らも三人の境遇と同様に亡国の遺臣であることを語る。彼は清朝を倒して明朝回復を図るが、事は失敗に終わり、今は亡命してアメリカの地を踏んでいるという。その話のなかで明末に先祖である鼎璉が清兵の攻められ窮地に陥し入れられたときの様子を次のように語っている。

璉、猶ホ王ニ従ヒ、殘兵ヲ集メテ遙ニ鄭成功ト声援ヲ通ジテ恢復ヲ謀ル。豈料ランヤ、呉三桂饑テ賊ニ降り、偽朝ノ封爵ヲ受ケ、躬親ラ清兵ノ為メニ前駆ス。緬甸王恐レテ曆王及ビ從臣ヲ執ヘテ清兵ニ送ル。（略）此時ニ當テ滿清薙髮ノ令ヲ下シ、中華ノ文物衣冠尽ク変ジテ夷狄ノ俗ト為リ、滿人乗勝ノ勢ヲ以テ老幼ヲ殺シ婦女ヲ辱シメ処士ヲ坑ニシ書生ヲ謫シ、可虐暴戾獐虎ヨリモ猛ク、間々忠義ノ士アリト雖モ姦臣ノ為メニ脅サレテカヲ展ブル所ナク、徒ニ言ヲ為シテ曰ク、暫ク恨ヲ飲ミ恥ヲ忍テ時機ノ到ルヲ待ベキナリト。（東海散士『佳人之奇遇』第二巻）

璉猶從皇招集殘兵。遙通声援於鄭成功以謀恢復。豈料吳三桂叛犯受偽朝封爵。甘為滿賊以前驅。進擊緬甸。緬王大恐。執曆皇及從臣以送於清軍。(略) 当此時滿賊蹂躪中原。民不聊生。各思休息。乃奉薙髮之令。而中華之衣冠文物。尽變為夷狄之俗。滿賊以乘勝之余。殺老幼。辱婦女。坑処士。謫書生。殺戮殘苛。其罪不可勝数。雖間有忠義之士。悉為漢奸賊臣之所脅。無所展力。徒為之言曰。暫為飲恨忍恥。以待時機可也。〔清議報〕第四冊)

(璉猶は皇に従ひ残兵を招集し、遙に鄭成功と声援を通じて恢復を謀る。豈料らんや、吳三桂叛犯して偽朝の封爵を受け、甘んじて滿賊のために前駆す。緬甸を進撃し、緬甸王大いに恐れて、曆皇及び從臣を執へて清軍に送る。(略) 此時に當て滿賊中原を蹂躪し、民聊生しえず、各休息を思い、乃ち薙髮の令を奉ず。中華の衣冠文物尽く變じて夷狄の俗と為り、滿賊乘勝の余を以て老幼を殺し婦女を辱しめ処士を坑にし書生を謫し、殺戮殘苛にして、其罪数うに勝うるべからず。間々忠義の士ありと雖も悉く漢奸賊臣の爲めに脅されて力を展ぶる所なく、徒に言を爲して曰く、暫く恨を飲み恥を忍て以て時機を待べきなりと。)

先祖の鼎璉は最後の最後まで清兵に抵抗をしたが、味方の裏切りに遭い、虚しく倒れる。この部分は『清議報』第四冊からの引用である。『清議報』第五冊の訳文では、この反清復明の志士である范卿の語り全体が削除されてしまっている。第四冊で翻訳された部分が全て翻訳されなかったこととみなされ、第三冊の終わりが第五冊の始めに続くという形に変えられている。そしてこの翻訳から消されてしまった部分は、范卿が自らの経歴と政治思想について語っている部分である。そこでは民族主義革命思想が語られており、表現にも当時有名であった鄒容の「革命軍」などの表現とも相通じるものが多々あると指摘されている。日本語で「豈料ランヤ、吳三桂讎テ賊ニ降り、偽朝ノ封爵ヲ受ケ、躬親ヲ清兵ノ為メニ前駆ス。」の部分の「清兵」を「滿賊」と訳し、「此時ニ當テ滿清薙髮ノ令ヲ下シ」の部分の「滿清」も「滿賊」と訳し、「滿人乗勝ノ勢ヲ以テ老幼ヲ殺シ婦女ヲ辱シメ処士ヲ坑ニシ書生ヲ謫シ」の「滿人」も「滿賊」とし、「間々忠義ノ士アリト雖モ姦臣ノ為メニ脅サレテカヲ展ブル所ナク」の「姦臣」は「漢奸賊臣」と訳している。このように民族主義思想を持つ表現と通じ合う訳文となっており、原著よりも「反清復明」の思想を過剰にした翻訳となっている。梁啓超自身が原文を逸脱して自らの思想を盛り込んでいるものと思われる部分であり、当時梁啓超が民族主義の革命思想に共感していた現れであると指摘されている。

この場面の後、突然話が現代に移る。先ほどのシーンは明末における范卿の先祖の話であったが、ここから清末道光年間における范卿自身の父の話となる。

道光二十年鴉片ノ乱起リ英軍入寇ス。時ニ我父白雲山ニ退隱ス。警ヲ聞キ奮テ人ニ謂テ曰ク、清朝ハ我ガ仇ナリト雖モ今ヤ兄弟ノ墻ニ鬩グノ秋ニ非ズト。即チ勇丁ヲ募リ舟師ヲ督シ、大ニ舟山ニ戦テ之ニ死ス。清将匪弱ニシテ、戦闘兇戯ニ齊シク、大臣、權ヲ争ヒ命令一ナラズ、此国家存亡ノ秋ニ当リ衣ヲ解キ食ヲ推シテ士心ヲ得ルコトヲ務メズ、糧ヲ盗ミ金ヲ竊ミ以テ士卒ノ飢寒ヲ致ス。是ヲ以テ士怠リ卒怨ミー戦支ユル能ハズ。北京遂ニ陥リ卒ニ地ヲ割テ城下ノ盟ヲ為シ、汚辱千載ニ流レ、帝命輕クシテ遠キニ及バズ、(東海散士『佳人之奇遇』第二卷)



時我父退隱於白雲山。聞警遂奮謂人曰。清朝吾仇也。誓不與共戴天。凡我同人。宜群起而攻之以救衆生。遂即募勇丁。督舟師。水陸並進。大戰於舟山。以衆寡不敵。力戰陣亡。憶我明。朝政積弱。大臣争權。際此内患外艱正国家存亡之秋。応如何上下同心。同仇敵愾。解衣推食。以得士心。而不此是務。以致兆民飢寒。士怠卒怨。一戰不能支。北京遂陷。坐失四百余州。汚辱流於千載。是可痛也。（『清議報』第四冊）

（時に我父白雲山に退隱す。警を聞き奮て人に謂て曰く、清朝は吾が仇なり。誓いて共に天を戴かず。凡そ我と同人は、宜しく群起して之を攻めるを以て衆生を救うべしと。遂に即ち勇丁を募り舟師を督し、水陸並進し、大に舟山に戦えども、衆寡を以て敵わず。力戦して陣に亡くなる。憶うに我明は、朝政積弱にして、大臣権を争ひ、此内患外艱国家存亡の秋に際し、応に如何にして上下同心、同仇敵愾、衣を解き食を推して士心を得べきが、此に是れを務めずして、以て兆民飢寒に致し、士怠り卒怨み、一戦支ゆる能はず。北京遂に陥り坐して四百余州を失い、汚辱千載に流れ、是れ痛むべきなり。）

この部分は全くの意識となっている。日本語原書では、アヘン戦争が勃発した際に范卿の父は外敵の中国侵略を防ぐためには民族間の争いをやめて一致団結で望まないといけなると説くが、清の軍隊は既に腐敗し切っており、士兵の士気が上がらず、イギリス軍に敗れて香港の割譲に至るとある。しかし翻訳ではアヘン戦争の勃発が省略されている。そして范卿の父がこのアヘン戦争に立ち向かう部分が、清朝打倒のために立ち上がり敗れて死ぬことになっている。その上、イギリス軍に対する敗北原因が清軍の腐敗であるとする部分を、清に敗北した明軍腐敗と置き換えて翻訳をしている。つまり、アヘン戦争における清軍対イギリス軍という構図を、中国語訳ではアヘン戦争を省略してしまい、清軍対清討伐軍というかたちで奇妙な置き換えを行っているのである。

このような置き換えの理由について、許常安「清議報第四冊訳載の『佳人奇遇』について」において「原著『佳人之奇遇』には明末忠臣の清軍に対する抵抗と志士達の清代における反清復明の武装蜂起を記してはいるが、何故あれだけの大国明があっけなくも異民族清に滅ぼされてしまったのかについては一つとも記していないからである。これは『佳人之奇遇』を滅清復明の民族主義革命闘争に役立たせるには、一つの落度であると訳者は考えたのだと思う。」と解説している<sup>18)</sup>。

ただ、このような解釈も可能と思われるが、訳者は原著のこの部分が小説全体の流れとして不自然に感じたから改変したという解釈も可能である。范卿の父は明朝遺臣であるのに、イギリス軍が攻めてくると突然自らの信念を翻し、民族間の争いよりも外敵との抗戦を優先すべきであると説く。しかし、小説の続きではその息子である范卿が清の打倒へと乗り出し敗れて亡命する。そのため、この部分の范卿の父の言動が前後の流れと矛盾してしまうのである。翻訳者が民族革命の思想に傾いていたのなら、なおさら范卿の父の言動は違和感を感じる部分である。

しかし、原著ではここの范卿の父の言動には整合性がある。この部分は東海散士が合津藩討伐の際に自害よりも捕虜となり国に仕える道を選べと主将に説得され、生き延びる場面对応している。藩への忠義よりも国家自体への忠義のほうが優先されるべきだという主張である。人物達の経歴にはそれぞれ違いがあるが、基本的には東海散士の分身のような存在であり、ある決定的

場面での行動パターンは同じである。彼らは全て国内の強者によって亡ぼされた亡国の遺臣であるという被害意識を持っているものの、国内の民族間、政党間の帰属意識以上により大きな国家自体の帰属意識の方が強い。国内政変によって迫害されているという彼等の被害意識は、いつのまにか列強から侵略される弱い国家への被害意識へと置き換えられ、それゆえに世界弱小国との連携という考え方が導きだされていく。そのため、東海散士の思想は決して革命へとは繋がらず、むしろ国権主義へと繋がっていくのである。翻訳者はこの東海散士の思考パターンをうまく汲み取ることができなかつたか、または理解はしていても違和感を感じたので、自らの思想を入れたと解釈することも可能である。

もう一点興味深いのは、日本語原著において清軍のイギリス軍に対する敗北原因は軍幹部の腐敗に帰している部分だが、中国語訳では明軍の敗北原因が国家体制の腐敗と変えられている部分である。梁啓超にとって、清が列強からの侵略に喘ぐのは唯単に軍幹部の腐敗という小さな問題にとどまらず、国家政府自体の腐敗が原因だと考えていたからであろう。それがこの部分の訳となって現れているのである。ここでは東海散士の国権主義的思想と、梁啓超の当時を持っていた思想との間に衝突がある。既に国家体制を安定させ新興近代国家となりつつあった日本にいる東海散士の国家観と、まだ近代国家建設に向けて奮闘中であった梁啓超とでは根本的に違いがあり、清朝政府をそのまま一直線に国家と結びつけることができない戸惑いが存在していたのであろう。

このように、小説における政治思想或いはイデオロギーは、主人公及びに人物の科白を通して表明され、翻訳において時には自らの思想を原作よりも自らの思想を優先させて翻訳するという姿勢がここからは窺える。しかもその翻訳の表現が当時流行していた文章からきているのである。翻訳と創作の区別がはっきりしなかつた時期において、梁啓超が序で述べた「往々にして其身の経歴する所、胸中に懐う所、政治之議論を以て、一に之を小説に託す」とはこのように直裁なたちで翻訳に織り込まれている。

ただ、この部分は保皇派の立場をとる康有為の指示によって後に削除されてしまう。先述のように、削除の仕方も『清議報』第三冊の途中から第五冊に直接続け、この部分をまるごと削除してしまうという手法が取られている。原著の范卿の科白を全て削除し、最後に「范卿者支那志士也。憤世嫉俗。遯跡江湖。与散士交最契。過從甚密。久耳幽蘭紅蓮之名。散士此行。早約其艤舟相待。至則范卿已久待河辺。一見各相行礼。（『清議報』第五冊）（范卿なる者は支那志士なり。世を憤り俗を嫉み、江湖に遯跡す。散士と交わる事最も契り、過從すること甚だ密なり。久しく幽蘭紅蓮の名を耳にし、散士の此行に、早く其艤舟にて相い待つことを約す。至ると則ち范卿は已に久しく河辺に待ち、一見して各相い礼を行う。）」と一言付け加えている。幽蘭と紅蓮に続く范卿の語りは原作の小説中において欠かせない要素である。この三人の経歴が散士の経歴と重なり、それゆえに四人は離れ離れになりながらも連帯を保ち、相通じるのである。そこから弱小国家の視点による世界の再構成という構造が生じている。しかし翻訳ではこのような削除を行っており、小説構成に対する考慮が欠けている。

ただ、清末の翻訳において小説の構成に対する意識は極めて薄く、むしろ翻訳を改変して自らの思想を人物の科白に組み込むという手法の方が却て清末の翻訳手法の一つとして定着していくことになる。清末において小説世界は独立した一つの世界を構成しておらず、常に現実と地続きであった。小説世界は当時の世界や中国の置かれた状況の解釈を人々に教えるために存在してい

るのである。そのため、小説家は政治家と同じ役割を果たすと考えられていた。梁啓超は日本語の「佳人之奇遇」に毎号附されている序跋を全て省略していたが、やはり目を通していたと思われる箇所がある。例えば「佳人之奇遇」第三編序に次のような一段が存在している。

歴史家ハ人間社会の事を誌す。然れども実事を実叙し偶ま文字を以て之を潤色するに過ぎざるなり。是故に古今の大家と雖も能く読者をして其昔時に遡り其実に當るの思をなさしむるもの稀なり。小説家ハ之に異なり作者の意欲に従ひ人物時勢を写し、其人物の心術動作悉く昏上に躍出し、筆其行かんと欲する所に行き墨止まらんと欲する所に止り、読者をして自ら其地に立ち其時に居り其勢に乗ずるの想あらしむるものなれば、固より歴史家とハ大に其旨を異にす。又夫の一国の政権を握り民間の政務を以て自ら任ずる大臣名士の如きも、広く世態人情を看破し古今を通覧し万事を網羅して能く之を分析し又之を総括し泰然動かさず。千年の大計を定むるの智量見識を具ふるにあらざれば其位の高きと其責の重きも必ず億兆の望を満足せしむること難し。而して小説を著す者能く毫端を以て天下を動かすを得べし。  
（東海散士『佳人之奇遇』第三編序）

政権を握り実務によって世界を動かすのではなく、筆によって世界を動かすのが小説家であり、小説家と政治家は相通じるものであることが述べられている。翻訳において「佳人奇遇」の著者は「日本東海散士前農商部侍郎柴四郎撰」という肩書きが添えられていた。梁啓超も次のように述べている。

著書之人皆一時之大政論家。寄託書中之人物。以写自己之政見。固不得專以小説目之。而其浸潤於国民脳質。最有効力者。則経国美談。佳人奇遇両書為最云。（『清議報』第二十六冊）  
（著書の人皆一時の大政論家なり。書中の人物に寄託し、以て自己の政見を写す。固より専ら小説を以て之を旨とするを得ず。而して其の国民の脳質を浸潤するに於いて、最も効力を有する者は、則ち経国美談、佳人奇遇の両書が最を為すと云う。）

「佳人之奇遇」はまさにこの役割を果たすべき最も相応しい小説であると考えたのであろう。省略された東海散士自序の代わりに、梁啓超自身が書いた「訳印政治小説序」が附されているが、そこにも同様のことが述べられている。

在昔欧洲各国変革之始。其魁儒碩学。仁士志士。往往以其身之所経歴。及胸中所懐。政治之議論。一寄之於小説。於是彼中綴学之子。鬢塾之暇。手之口之。下而兵丁。而市僧。而農氓。而工匠。而車夫馬卒。而婦女。而童孺。靡不手之口之。往往每一書出。而全国之議論為之一変。（『清議報』第一冊）

（昔欧洲各国変革の始めに在りて、其の魁儒碩学、仁士志士は、往往にして其身の経歴する所、及び胸中に懐う所、政治の議論を以て、一に之を小説に寄す。是に於いて彼の中の綴学の子は、鬢塾の暇に、之を手之口にし、下は兵丁、市僧、農氓、工匠、車夫馬卒、婦女、童孺までも、之を手之口にせざるはなし。往往にして一書の出づるごとに、全国の議論

は之の為に一変す。）

そして、東海散士自身も政治的見解をのべた小説は、その形式においても以前の戯作とは異なるべきであると考えていた。

稗史家ハ則チ、之ヲ難ジテ曰ク、卷中痴話情愛ノ章少ク、遊里歌舞妓ノ談ナク、徹頭徹尾凡テ是レ慷慨悲壯ノ談ノミ、故ニ一見倦厭ノ念生ジ易シト。（東海散士『佳人之奇遇』自序）

小説中に所々に織り込まれた漢詩、漢文調の格調高い文章。これらの表現方法は従来の小説表現とは相容れないものであり、東海散士自身の士族的なエートスの表出でもあった。梁啓超がこの作品に深い感銘を受けたのは内容ばかりではなく、その形式においても士大夫の価値意識を載せるべき相応しい形式を備えていると考えたからであろう。そのため、翻訳は原著の風格をそのまま汲み取った名訳となっている。<sup>19)</sup>

ただ、このような小説形式は通俗的とは言いがたく、農民や車夫や婦人の読む小説ではない。梁啓超は「下は兵丁、市僧、農氓、工匠、車夫馬卒、婦女、童孺までも、之を手口にせざるはなし」と述べ、政治小説が一般の娯楽小説と同次元で国民全体に受け入れられると単純に想定しているが、これらの政治小説は実際の国民の読解レベル、読書趣味からはかけ離れていた。

陳平原氏は当時清末の状況について次のように語っている。<sup>20)</sup>

小説で群治を改良するのに有益であると信じて、小説を政治革命の道具とするために最も実用的な小説のタイプは勿論「借りて以て其の懐抱する所の政治理想を吐露する」政治小説である。最も有効な手法は小説を論文として書き、大量の科学、法律、軍事、政治問題、専門用語を引用することである。最も効果的なのは思想啓蒙のための「教科書」となることである。これは自然に行き着く考えであり、『新小説』理論家はまさにこのようにしたのだった。しかし、このような理想的な「新小説」はすぐに読者の嗜好の厳しい挑戦に直面することになる。本屋は「口を開くと喉が見える」と売れないと言い、作家は「議論が多くて事実が少ないのは小説の体裁に合わない」と言う。読者に「経史を読む如く小説を読む」ように要求するのはその発想はよいが、ただ一般読者の読書趣味からひどく逸脱し、小説を危険な崖っぷちに立たせただけだった。

小説が論文とは異なって通俗性を持つ理由は形象性という小説の特徴にある。つまり、概念を用い論理によって書かれている論文とは違い、小説は人物などが動くことによって進行する具体的な物語の形をとっている。それゆえ、「佳人之奇遇」のように、類型化した人物達が自らの政治的主張をひたすら語り続ける形式は本来ならば読みづらい小説なのである。このことはやはり当時においてもある程度は認識されていたのであろう。それが『清議報』に「佳人之奇遇」の後に「経国美談」を訳載することに繋がっているのではないかと思われる。

### 第三節 「経国美談」

「経国美談」は明治十六年（一九八三年）に矢野龍溪によって書かれた。先の「佳人之奇遇」同様に、明治初期には多くの政治小説が生み出されたが、その背景には日本の政治状況が密接に関係している。明治七年、自由民権運動は高まりをみせ、政府が明治十四年に国会開設の勅諭を発すると、様々な政党が結成される。政党に属する者が宣伝として自らの所属政党の政治思想を託した政治小説を続々と執筆発表し始める。「経国美談」も古代ギリシアのテーベを舞台としているが、実際は著者である矢野龍溪が自らの政治思想を盛り込んだ小説である。ただ検閲で直接に政治思想を語ることが許されなかったため、日本と離れた古代ギリシアという舞台設定を選んで検閲を逃れるという手段がとられた。<sup>21)</sup>

著者の矢野龍溪は福沢諭吉の紹介で大隈重信のブレーンとして統計院幹事兼太政官大書記官の職に就いていたが、明治十四年に国会開設の勅諭が下されて大隈重信が免官されると、彼も下野した。その後、彼は自由民権運動の論客として活躍するようになり、明治十五年三月に明治二十三年に予定された国会開設をめざして立憲改進黨を組織する。この立憲改進黨にはインテリが多く、矢野龍溪のほかにも藤田鳴鶴、尾崎学堂、坪内逍遙などの錚々たるメンバーが参加していた。他にもユーゴーの翻訳家として有名な森田思軒も改進黨のイデオロギーを自らの思想としていた。

この時期の政党は立憲改進黨のほかに、代表的な党として自由党、立憲帝政党がある。それぞれの政党の主張を比較すると、立憲帝政党は専制を目指す、立憲改進黨の主張は自由党と同様に民権的である。自由党はフランス民政に範をとり、主権在民、民権第一とし、自由平等をもって立憲思想の柱としている。自由党は革命による政権樹立にも肯定的であるが、立憲改進黨はそれほど急進的ではない。立憲改進黨はイギリスに範をとっており、主権在官民であるが、政治の基本は議会にあるとする。自由平等は尊重するが、平和主義的で斬新的な民主化を要求している。このように、明治十五年頃から日本の政治小説は作家個人の思想よりも、むしろ政党の政治理念の方が主に小説に盛り込まれるようになっていった。矢野龍溪は改進黨のイデオロギーでもあるので、「経国美談」には基本的には改進黨の政治理念に基づいて書かれている。

この「経国美談」が書かれることとなった直接的な動機について、矢野龍溪の自序によると、明治十五年初夏に病を得て熱海で静養し、無聊に耐えずしてギリシア史関係の本を読んだが、その本には古代ギリシアのテーベの勃興に関する事跡が書かれていたとある。興味をもった矢野龍溪はテーベの歴史的事跡に関する本を訳述しようと試みるが、テーベ勃興に関する歴史を詳記する本を見つけ出すことができなかった。そこで顛末の欠漏を補って小説体で書いてみようという発想が浮かび、「経国美談」として結実した。

しかし、矢野龍溪はこの歴史事実を小説化するに当たって次のような姿勢で臨んでいる。

然レトモ予ノ意、本ト正史ヲ記スルニ在ルカ故ニ尋常小説ノ如ク擅ニ実事ヲ変更シ正邪善悪ヲ顛倒スルカ如キコトヲ為サス。唯実事中ニ於テ少シク潤色ヲ施スノミ。（『経国美談』自序）

凡例でも「一著者カ此書ヲ編ムヤ本ト正史中ノ実事ノミヲ纂訳スルノ心組ナリシニ書中ノ事柄ハ遠キ古代ノ事ニシテ諸書ヲ搜索スルモ断続シテ詳ナラサル所アリ。因テ之ヲ補述シ人情滑稽ヲ加テ小説体ト為スニ至レリ。然レトモ本ト正史実事ヲ専ラ記載スルノ本意ナルカ故ニ豪モ正史ノ実事ニ悖ラサルヲ勉メタリ。（『経国美談』凡例）」とある。この小説が正史に基づいており、ただ足りない処を補ったのみであり、正史から外れるものではないことが強調されている。またそれだけではなく、凡例に「一、読者ヲシテ小説ヲ読ムノ愉快ヲ得ルト同時ニ正史ヲ読ムノ效能ヲ得セシメ且ツ是書ノ全ク正史ニ拠ルヲ知ラシメンカ為ニ正史中ノ実事ニハ一々符号ヲ付シテ之ヲ表示セリ。（『経国美談』凡例）」とある。これらの考え方はまさに先に述べた清末の知識人たちが正史が読めない一般大衆も小説なら娯楽として受け入れ、啓蒙となると考えた効用論と一致している。

更に「正史中ノ実事ニハ一々符号ヲ付シテ之ヲ表示セリ。」とあるように、イ～イ、ロ～ロのような小さな記号を本文の横につけ、その小説の記述が凡例の後に挙げた引用書目の史書のどれに当るのかを示すという手の込んだ事までしている。矢野龍溪が小説が正史に拠っていることにここまでこだわった理由は、小説の意義が正史の欠を補い、考証に資するところにあるという伝統的な文学観からきていることは言うまでもない。そのような伝統的な規範意識からすると、小説を書くということは「嗚呼一部ノ戯著予カ数句ノ思ヲ費ス閑文字ヲ作ルノ嘲リヲ志士ニ免レサルヲ知ルナリ。（『経国美談』自序）」。明治初期の日本知識人にとって、小説蔑視の観念は根強く、また一般的な発想であった。

自序でこのように述べる矢野龍溪は実際に小説の執筆に当たって江戸時代の遺風を受け継ぐ読本型の戯作風小説ではなく、知識人層の啓蒙を視野に入れて創作している。この小説には各回後に評が附されているが、最後に藤田鳴鶴の跋はまさにこの点を指摘している。

本邦著稗史小説者。多不学無識。是以其所作概鄙俚浅陋。不過供婦女子觀玩。余每讀之。深以為憾。抑泰西所行小説。多成於博識家手。是以立論精確。命意峻爽。記事叙情之際。片言標新。双語領異。以平易談話。論破政治得失。弁晰風俗美惡。故其書之行。必能廉頑立懦。極有補於世教人心矣。頃日龍溪矢野君。拋希臘古史。作一編齊武民政興廢記。詳記當時形勢。考索烈士報國之蹟。名曰経国美談。（略）蓋本邦人著泰西小説者。以君為嚆矢。而本邦小説關係政治風俗者。以此書為破天荒。（『経国美談』跋）

（本邦の稗史小説を著する者は、多くは学ばずして識無し。このゆえに其の作る所は概して鄙俚浅陋にして、婦女子の観玩に供するに過ぎず。余は之を読むごとに、深く以て憾と為す。抑も泰西に行わるる所の小説は、多く博識家の手に成り、このゆえに立論精確、命意峻爽とす。事を記し情を叙ぶる際には、片言標新、双語領異にして、平易なる談話を以て、政治の得失を論破し、風俗の美悪を弁晰す。故に其の書の行は、必ず能く頑を廉にし懦を立し、極めて世教人心に補う有り。頃日龍溪矢野君は、希臘古史に抛り、一編の齊武民政興廢記を作る。当時形勢を詳記し、烈士報國の蹟を考索す。名は経国美談と曰く。（略）蓋し本邦人の泰西小説なる者を著するは、君を以て嚆矢と為す。しかるに本邦小説の政治風俗に關係する者は、此書を以て破天荒と為す。）

序には「読者ヲシテ小説ヲ読ムノ愉快ヲ得ルト同時ニ正史ヲ読ムノ効能ヲ得セシメ」とあったが、その対象は決して「婦女子」ではなく、むしろ政治理念を共有する同志となり得べき人士を対象としていたことがここからわかる。当時の政治小説のレベルは一般的にあまり高いとはいえないが、「経国美談」は稀に完成度が高く、閑文学ではなく、士大夫文学に読まれることを期待して構成されている。

それでは小説の内容についてみてみよう。小国テーベは二大大国、共和制のアテネと寡人専制のスパルタとの間で常に不安定な位置を占めていた。テーベの正党はアテネと同じ共和制を採用し、スパルタを後ろ盾にした専制政治を狙う奸党と敵対していた。紀元前三百八十二年、テーベの奸党レオンティアディスによってスパルタを後ろ盾にクーデターで政権を奪われ、正党のペロピダスらはアテネへの亡命をよぎなくされる。しかし正党人士はアテネの民主党名士の力を借りて、奸党を打ち破り、内政を安定させる。内政の安定後、ギリシアの覇権を握ろうとするスパルタを牽制して独立を保ち、ギリシアの覇者となる。

この小説において、テーベ正党の名士達が目指す共和政治体制が、矢野龍溪の所属する改進黨の政治的理想と重なるという仕組みになっている。改進黨の政治理念は、過激な暴力による革命での政権交代は容認しないが、専制ではない立憲民主制の政治体制を目指すというものである。

第二回に次のような一節がある。

凡ソ人其ノ内部ニ疾病アルニ当テヤ其ノ心力ヲ充分身外ノ事ニ及ホス能ハス。邦国ノ状勢モ亦タ然ルノミ。其ノ人民実ニ内政ニ満足シテ国内安寧無事ナルニアラサレハ全国ノ人心甘ンジテ外事ニ向フコト能ハス。故ニ其ノ国勢ヲ張ラント欲スレハ必ス先ツ内政ヲ整頓ス。是レ自然ノ定法ナリ。（『経国美談』第二回）

ここでは国の政治を人間の身体に喩え、人間の内部に疾病があると十分に力を発揮できないように、国も内部を安定しないと外国への国政を張ることができないので、まず内政を安定させることを優先すべきであると述べている。これは同時に改進黨の綱領第二章「内治ノ改良ヲ主トシ国権ノ拡張ニ及ホス事」に拠っており、国権を張るにはまず内政を整えるのが先決という改進黨の綱領が盛り込まれている。前編最終回に正党が政権を奪回したのち「<sup>22)</sup>斯ク諸般ノ事已ニ全ク終リケレハ人心安着シテ今ハ内政ニ一ノ不満ヲ訴フル者ナク一國ノ人心協同セル其ノ有様ハ恰モ人体内部ノ病疾ヲ療シ得テ已ニ全ク強壯健全トナリ今ヤ身外ノ事ニ満身ノ力ヲ尽サンコトヲ思フモノノ如ク人民ハ只管列国ニ対シテ国勢ヲ振擧スルノ機会ヲ望ムノ有様トナレリ。」という部分と呼応しており、テーベが内政を治めることができたためにスパルタに侵略されずギリシアの覇者となる可能性が開けたと述べている。

同時に、これは当時の日本政治状況とのアナロジーになっている。<sup>23)</sup>つまり明治二十二年に発布される予定の帝国憲法に則って、立憲君主制を整えて民主的政治体制を確立し、ヨーロッパの強国から独立を保ちながら世界へと進出をし、アジアの覇者となるという構想を含んでいるのであろう。そこで小説の前編においては内治の改良をテーマとし、後編は国権の拡張について描いて<sup>24)</sup>いる。小論では紙面の制限もあり、前編のみを取りあげて分析する。

テーマについては以上の通りであるが、先述のように小説に描かれた出来事は小説中に記号を

付けて典拠となる史書を示しているにもかかわらず、歴史的事実を改竄している箇所が多々みられるのである。例えば、小説中でテーベは奸党によって政権を奪われる以前は一貫してアテネの共和制度に倣っていたと書かれているが、史実ではオイノピュライの戦いによってこの小説が始まる時期には既にテーベの共和制度は崩壊していた<sup>25)</sup>。また、テーベはペロポネシヤの戦いでもスパルタの盟邦としてアテネ側を攻撃している<sup>26)</sup>。

これらはテーマを明確にするための故意の改竄であり、作者が意図的に史実を隠蔽しているといえる。つまり、「経国美談」自序において小説の意義は史の考証に資するという伝統的な文学観が、あるテーマに沿って歴史事実を材料にして一貫した構成するという近代的歴史小説の考え方と矛盾をきたしているのである。「経国美談」は近代以前の要素と近代の二つの要素が衝突を起こしている過渡期的な産物となっている<sup>27)</sup>。

このような過渡期的特徴はあらゆるところに見てとることができる。例えば、人物形象。評者藤田鳴鶴が第二十回最後に「作者以智力。良心。発情。三者。組成是書。巴氏則是智力。威氏は良心。瑪留是発情。（作者は智力、良心、発情の三者を以て、是書を組成す。巴氏は則ち是れ智力なり。威氏は是れ良心なり。瑪留は是れ発情なり。）」と指摘するように、それぞれの人物像は典型的な人物形象として描かれている<sup>28)</sup>。そしてこれらの典型的な人物形象は中国白話小説「水滸伝」などの影響を受け、場面構成においても「西廂記」や江戸時代の「里見八犬伝」などの影響を受けている<sup>29)</sup>。しかし、これらの人物は全く伝統的な小説の才子佳人の典型でもなければ、江湖の英雄でもなく、民主制という政治体制回復を目指す政治家である<sup>30)</sup>。このように所々に伝統的な小説を超えた近代化した描写も見られるのである。

このような特徴は内容だけではなく、形式においてもみられる。「経国美談」において使われた文体は時文であり、その実質は漢文、和文、欧文直訳、俗文の四体の兼用であった。矢野自身、序において前編では日本旧来の稗史体を用いようと努めたが不慣れでなかなかうまく書くことができなかつたため、後編では欧文直訳と漢文が三分の二を占めたと述べている<sup>31)</sup>。当時において、このような文体は戯作調を脱した非常に斬新な文体であり、政治小説の作家は文体革新の先駆となったとも指摘されている<sup>32)</sup>。他に回の切れ目についても、伝統的章回小説は読者の次回を読む意欲を注ぐために興味深い処で終わるという形式をとっているが、「経国美談」においてはその手法が用いられている箇所は多くない。前置きなしの語り起こしの方法等にも西洋小説風工夫がみられる<sup>33)</sup>。

しかし、中国語訳では原書の「経国美談」に見られるこのような近代的要素が全く除かれてしまうのである。「経国美談」は一八九八年に羅普によって翻訳されて『清議報』に連載されたが、その翻訳の意図は矢野龍溪の意図とはかなり異なるものであった。矢野龍溪は自序で自らの文学観を述べ、小説が正史に依拠している事を再三強調していたが、翻訳ではこの自序と凡例は省略されており、訳者である羅普は原作者の意図に対して全く無関心であったようである。羅普はこの作品を自分なりの方法、もしくは彼を取り囲む同志達の考えに基づいて翻訳していると思われる。

中国語訳の「経国美談」は小説形式に大きな改変がみられるが、それは翻訳姿勢の相違が起因となっている。矢野龍溪の「経国美談」は史実に改進黨の政治綱領を打ち込ませる手法を巧みに用いており、それはあまりにも巧みなために読者には本当の出来事のように感じさせていた。し



かし、翻訳になるとそのような原著の工夫はほぼ無視されてしまい、読者は小説中に盛り込まれた改進黨の政治理念に気づかずに小説を読むことになる。

例えば、小説のクライマックスに次のようなシーンがある。正党のペロピダスはアルチアスら奸党を策略で捕らえた後にテーベ市民を人民会堂へと一堂に集めて事情を説明する。ペロピダスは自らが法に則らずに策略を用いて奸党を陥れた事について次のように述べる。

又会堂群集ノ中ニ於テ巴氏ハ此夜ノ顛末ヲ報告スルガ為メニ儀式ノ演説ヲナシ且ツ有志者等ガ国法ヲ犯シテ擅ニ諸人ヲ捕獲セル罪ヲ述ヘ回復ノ大事定マル上ハ人民ノ命從テ就刑スヘキ覚悟ナルコトヲ説キ出セシニ（『経国美談』第十九回）

巴比陀便対各人民。演説今晚斬除奸党的瑣末。及回復民政的意見。並自謝不請命人民。擅自捕殺奸党的罪過。（『清議報』第五十冊）

（ペロピダスが人民に対して、今晚の奸党を始末した顛末と民政を回復する考えについて演説をし、人民の命を請わずに奸党を独断で捕殺した罪を謝った。）

このペロピダスの科白「国法ヲ犯シテ擅ニ諸人ヲ捕獲セル罪ヲ述ヘ回復ノ大事定マル上ハ人民ノ命從テ就刑スヘキ覚悟」は、暴力的革命によって政權篡奪しないという立憲改進黨政治理念が込められている。中国語訳ではペロピダズが奸党を自らの判断で殺した事について詫びているが、この事件が収拾すれば法の裁きを受けるという部分は省略されている。訳者には奸党を処罰して法の裁きを受けるとするのは行過ぎであると感じたためと思われる。そのためこの部分は簡潔に訳され、原著の意図が読者に届かない。

また正党によるクーデターが成功した後に、紀元前三百七十八年一月一日、新たに選出された行政官と議員の着任日に民政回復の大祝祭が施行された場面においても省略がみられる。新任した二人の総統官はこの大祝祭にて歓喜する人民を前に演説し、ペロピダスは亡くなった同志へ思いを馳せて感慨にふける。

斯テ此行列ノ本城ニ進ミ入りシ後、兩人ノ新総統官ハ兼テ設ケタル誓盟ノ席ニ充滿セル無数人民ノ面前ニ於テ誓盟席ニ進ミ人民及ヒ諸議員ニ向ヒ

国法ヲ奉シ民心ニ順ヒ謹シテ職務ヲ奉スヘシ。

トノ誓詞ヲ陳ヘケレハ此時人民ハ一斉ニ声ヲ放ツテ歓呼シタリ。夫ヨリ職位ノ順序ヲ以テ新議員及ヒ先輩長老與ニ皆其ノ誓盟ヲナシ此ニ回復祝祭ノ盛式ヲ畢ツテ国事全ク定マリタリ。（『経国美談』第二十回）

新総統官の「国法ヲ奉シ民心ニ順ヒ謹シテ職務ヲ奉スヘシ」の科白は、立憲改進黨の理念である法に基づく合法的な政權樹立を強調している。ここはまさに小説のクライマックスであり、非常に重要な部分であるが、中国語訳ではこの大祝祭の場面全体が省略されている。このように中国語訳では改進黨の理念は時には簡略化され、時には省略され、テーマとして翻訳に反映されていない所も少なからずある。

政権の正当性確認後に国の一大事に貢献した功労を賞し、遺族への年金支給と奸党の処分が決まる。人民は奸党を死刑に処することを望むが政府は奸党を島流しとする。テーベはここに民主制を回復するのだが、再びスパルタが再びテーベの独立に干渉し、スパルタ王クレオンブリュタス率いる軍隊がテーベへと進出した。これに対し、エバミノンダズの率いる軍隊はスパルタ軍を撃退する。

又齊武ハ未タ斯波多ノ如ク強大ナラス且ツ同盟列国ノ援兵ナシト雖モ其国内已ニ全ク整頓シテ人心方ニ外事ニ向ヒ加フルニ為政ノ才略アル巴比陀用兵ノ武略アル威波能等ノ如キ人材有テ壯武ナル国人ヲ左右スレハ斯齊二国ノ勝敗優劣ハ未タ容易ニ之ヲ定ムヘカラス。（『経国美談』第二十回）

這時斯波多獨霸希臘境内。素来最強的阿善。還不能敵他。何況齊武。所以人都替齊武着了。一急。雖然。齊武是新興国。勢子正銳。那里管甚麼霸国不霸国。人以兵來。我以兵性。斷不肯降氣的。並且有長於行政的巴比陀。善於用兵的威波能等人。国雖徧小。却不信便被人压倒。所以斯齊的競争。恰似強獅遇着猛虎。一時不能分出勝負出來。所以希臘境内。又起了大波瀾。（『清議報』第五十一冊）

（この時、スパルタは独りギリシア内で覇権を握っていた。本来最も強かったのアテネもやはりスパルタには敵わなかった。テーベは言うまでもない。そこで人々はテーベのために焦ったが、テーベは新興国であり、その勢いはまさに激しく、覇国かどうかなどは気にもとめない様子であった。人が兵をもってやってくるなら、こちらは兵性をもって来る。断じて降参はしない。しかも行政に長けたペロピダスと兵を用いるのが上手いエバミノンダズ等がある。国は小さいけれども、人に圧倒されるとは思わない。そのためスパルタとテーベの競争はまるで強い獅子が獠猛な虎に出会ったかのようであり、一時で勝敗を分けることができなかつた。そこで、ギリシア内ではまた大波乱が起こった。）

テーベは強国スパルタと互角に渡り合い侵略を許さずに独立を保った。その勝因は「其国内已ニ全ク整頓シテ人心方ニ外事ニ向ヒ」とあり、内政の安定に求めている。しかし中国語訳では「人以兵來。我以兵性。斷不肯降氣的。（人が兵をもってやってくるなら、こちらは兵性をもって来る。断じて降参はしない。）」と意識されている。「斯齊二国ノ勝敗優劣ハ未タ容易ニ之ヲ定ムヘカラス」の訳は「所以斯齊的競争。恰似強獅遇着猛虎。（そこでスパルタとテーベの競争はまるで強い獅子が獠猛な虎に出会ったかのようであり）」と獅子と虎の喩えで説明している。内政の整頓と国権の拡張という主題が翻訳の表面からは見えてこない。

矢野龍溪は自序で正史に悖らない事を強調し、そのため史実と異なる事実についても小説内では恰も史実であるような工夫を施す書き方をしていた。しかし中国語訳では小説内の出来事が事実であるか否かにはまるで拘りが無いようである。例えば民主制回復後に四百名公会と行政議官の改選を決定した場面では、「斬テ此月即チ十二月ノ末ニ至リケレハ日ヲ刻シテ其ノ当撰者ノ報告ヲナシケルカ其報告書ニ擲レハ巴比陀威波能及ヒ加倫勢応本ノ四人ハ総統官当撰者ノ中ニテ投票最モ多数ナリケリ（『経国美談』第二十回）」と記述している。史実によると当選者はペロピダ

ス、メロン、カローンの三人であり、ここは史実と異なっているのだが、まるで史実がそうであるかのように具体名を挙げて記述している。このような具体性は矢野の正史の叙述方法に対する拘りであり、歴史事件の年月日を挿入し、歴史事件発生の順序を重視する手法にも繋がっている。<sup>34)</sup>しかし、この部分の中国語訳では「十二月末」を省略して「這時拳巴比陀威波能為行政総統官的最多（『清議報』五十一冊）。（この時、ペロピダスとエバミノダズを行政総統官として挙げた者が最も多い。）」と訳され、矢野龍溪のこのような工夫が翻訳上に活かされていない。<sup>35)</sup>

矢野龍溪は小説に手を染めた事を恥じる姿勢をとりながらも、江戸時代の人情本から逸脱した士大夫のための「上の文学」を目指す志向を持っていた。先述の描写上の工夫が正史を補うという小説の意義に対応していることは言うまでもなく、東海散士の「佳人之奇遇」とも共通する指向であった。しかし、中国語訳を比べてみると、「佳人奇遇」が著者東海散士の意図を見事に汲み入れた名訳であるのに対し、「経国美談」の翻訳は反対に原著者の意図を解体する方向へと向かっているのである。

中国語訳の俗化表現は人物の科白においても見出すことができる。ペロピダスは最も多き票を得て当選するが、辞退するという科白に次のようにある。

政法ヲ改良シ政体ヲ改革シテ以テ己ヲ救ヒ人ヲ救ヒ自他ノ福利ヲ増進シ仰テ天ニ愧チス俯シテ人ニ愧チス内ニ顧テ其ノ良心ニ満足スルヲ以テ報酬ト為スハ是レ政治家ノ本意ナリ。  
（『経国美談』第二十回）

改革政体。整頓国政。凡政治家の本意。無非是救身救国。増進自己及他人的福利而已。却毫不可腌臢夾雜在內。起了甚麼想功名求富貴の念頭。（『清議報』第五十一冊）

（政体を改革し、国政を整頓する。凡そ政治家の本意は己を救い国を救い、自分と他人の福利を増進することに他ならない。しかしそのなかには汚いものが混ざったり、功名富貴を求める考えを少しも起こしてはいけない。）

矢野龍溪自らがここに「首回、威波能ノ言、以テ政治家ノ令徳ヲ写出シ、予ジメ後來誅奸ノ功、万已ムヲ得ザルヲ見ハス。尾回、巴比陀ノ言、以テ政治家ノ本意ヲ写出シ、亦タ前面誅奸ノ功、万已ムヲ得ザルヲ見ハス。夫レ巴威ノ丕功、既ニ万已ムヲ得ザルニ造レバ、本篇ノ著、亦タ固ヨリ万已ムヲ得ザルニ成ル矣。蓋シ首尾両雄ノ映対スル処、乃チ作者精神ノ注匯スル処ニシテ、読者豈ニ兔渉スベケン哉。（『経国美談』第二十回）」という注釈を施している。この部分は大義のために民主制回復の事業に参加したのであり、地位を得るためではないと固辞するペロピダスを東洋的観点から理想化した部分である。ペロピダスの科白である「仰テ天ニ愧チス附シテ人ニ愧チス内ニ顧テ良心ニ満足スル」には孟子の典故が使用されており、儒教道徳や士大夫意識と繋がっている。

しかし奇妙な事に中国語訳では孟子の典故がわざと訳されておらず、「改革政体。整頓国政。凡政治家の本意。無非是救身救国。増進自己及他人的福利。（政体を改革し、国政を整頓する。凡そ政治家の本意は己を救い国を救い、自分と他人の福利を増進することに他ならない。）」となっている。これは訳者が文言的で修辭的な表現を排除して簡明な俗語的表現を用いようとしたからであろう。

他にもペロピダスとレオナの恋愛の場面を次のように描写している。「正二是レ暖ヲ送ルノ軽雨花稍ク綻ヒ、溪ニ入ルノ春風鶯將サニ囀セントス。若シ双方ノ中ニテ孰レカ請求スル所アラハ其事ハ直チニ行ハル可キ有様ナリシニ（『経国美談』第九回）」という部分を、中国語訳では「那時両心蕩漾。両意纏綿。仮使兩人之中。有一人有所請求。那一人自連声諾諾了（『清議報』第四十三冊）（その時、二人の心は揺れ、惹かれあった。仮に双方のいずれかが何かを求めれば、もう一人は直ちに同意しただろう。）」と翻訳している。ここでも日本語原著にある文人的表現が翻訳には反映されていない。同じく、この二人の別れのシーンを描写して「令南ハ昨夜ノ注意ニ因テ今日シモ親シク巴氏ト相語ルヲ喜フノ間モナク今又其人ト遠ク相別ルルノ悲ミヲ嘆チケル。彼ノ刺客ノ為メニ二人カ相思フテ相離ルルノ有様ハ恰モ是レ黒風浪ヲ翻シテ文鱗ヲ打散シ、赤焰林ニ騰テ采翻ヲ驚分ス。（『経国美談』第九回）」という水滸伝を踏まえた文学的な表現も省略されており、「数月同居。一朝離別。甚是恋恋難捨。那令南見巴氏忽要離別。更是淒涼無趣。便覺自己神魂。也隨巴氏搬去別処了。（『清議報』第四十三冊）（数ヶ月一緒に暮らし、今日にも別れるのは何とも名残惜しいものである。かのレオナはペロピダスと突然別れるのがわかると、更に寂寥で心が塞がれる感じがし、自分の魂もペロピダスと共に他へと行ってしまおうかのように感じた。）」と翻訳している。このように漢文的素養を必要とする部分は俗的表現に変えられ、日本語原著にみられた細かい工夫も中国語訳においては故意に俗化されているのである。

以上に加えて、中国語訳「経国美談」の形式は旧白話小説の形式を故意に模倣した形跡が見られる。先述の通り、日本語原書において回の終わり方が旧章回小説とは異なることについて述べたが、中国語訳では章回小説の通例に倣い、読者の読書意欲をそそるような興味深い箇所を切る終わり方をしている。その他にも、旧白話小説で通常よくみられる「語り手（説書人）」を用いている。以下、その例をみてみよう。

話は前後するがアテネに亡命していたペロピダスら有志が政権を奪回するために用いた策略とは、正党人士が奸党アルチアスをフィルリダス邸の宴席に招き、婦人に変装して捕らえるというものであった。紀元前三百七十九年十二月十一日午後二時、ペロピダスら有志達は到着予定が遅れている有志を待っていた。すると、一通の手紙が届いた。そこには、有志達が待ち伏せのために潜んでいた館の主人カローンが奸党のポレマレスコス邸に至急訪れるよう書かれていた。有志らは自らの計画が露見したのではないかとひやりとしたがそうではなく、物事は無事に進み、宴も酣になった。奸党のアルチアスが安心しきって酔いもまわった頃、一人の使者がやってきた。

然ルニ二更ノ頃ニ至リ俄カニ上坐ナル奸党亜留知ノ宅ヨリ至急ノ使者到来シ阿善ノ親族亜留知ヨリ大事ノ急書ヲ齎シ来レハ是非トモ亜留知ニ面謁ヲ請ヒ度キ旨ヲ申入レタリ

亜留知ハ其ノ使者ヲ宴席ニ延テ対面セシニ使者ハ其書翰中ニ極メテ大切ノ事ヲ記シアル旨ノ伝言ヲ致シ之ヲ其手ニ授ケタリ。亜留知ハ其書翰ヲ受取りシガ酩酊ノ余リニヤ其使ニ向ヒ大切ノ書状ハ明日ノ事ナリ

ト書翰ヲハ其儘己ノ懐中ニ収メテ之ヲ披キ見ズ直チニ使者ヲ帰シケリ。此書翰コレ是レ彼ノ阿善ノ行政官亜留知カ此ノ夜ノ密謀ヲ洩レ聞キテ之ヲ通知センカ為ニ急使ヲ飛ハシテ送り来リシ者ナレ。若シ此席ニテ奸党カ此書翰ヲ披見セハ有志者ノ計策ハ忽チ此ニ露頭シテ事皆画餅ニ属スベキニ今奸党ガ書簡ヲ披見セスシテ直チニ之ヲ懐中セシコソ是レ天ノ未タ齊武人

民ヲ遣テザルノ致ス所ナルヘケレ。（『経国美談』第十八回）

自阿善亜留智家遣發来的。要見亜留知呈上一封書信。並說道。我主人說是極緊要的書信。所以呼我連夜送来的。亜留知便自上座把書信接過來。看官你道這是甚麼書信呢。這個便是亜留智的密報。把各志士の計策。報與亜留知。救他死命的。這送信人恰好跑到他家裏。他早進了比留利家。所以直跑到這裏親遞給他。誰料他罪惡貫盈。應該敗事。接了這封書。不耐煩拆看。說道。甚麼緊急事情。明日再看不遲。便把來揣在懷裏。看也不看。（『清議報』第五十冊）

（アテネのアルチアス家から遣わされてきたのであった。アルチアスに直接手紙を差し上げたく、次のように言った。私の主人は非常に緊急な手紙だと言っております。そこで私を呼んで夜のうちに遣わしたのです。アルチアスは上座から書簡を受け取った。さあ、皆さんこれは何の手紙でしょうか。これはアルチアス家の密報でした。志士の方々の計略をアルチアスに知らせ、彼の命を救うためでした。この書簡を運んだ者は彼の家に行ったのですが、彼はとっくにヒリップ家へ上がっており、そこでそのまま此処まで来て直接彼に渡したのです。まさに悪行の限りを尽くして失敗する運命とは誰が予測したのでしょうか。この手紙を受け取ったが、封を開けて見るのが面倒であった。どんな急用だったとしても明日見ても遅くはあるまいと言った。そこで手にとって直ぐに懷に仕舞い、見さえもしなかった。）

使者がアルチアスに渡したのはアテネの親類から手紙であり、そこには志士達が今まさに実行しようとする策略が書かれていた。しかし酔いの回ったアルチアスは「大切ノ書状ハ明日ノ事ナリ」と懐にしまいこむ。このアルチアスの科白は多くの史書に載せられており、それらを典故にしている。しかし、中国語訳では「甚麼緊急事情。明日再看不遲。（どんな急用でも明日見ても遅くはあるまい）」と口語化して訳し、原書の「天ノ末ヲ齊武人民ヲ遣テザルノ致ス所ナルヘケレ。」を「看官你道這是甚麼書信呢。（さあ、皆さんこれは何の手紙でしょうか）」と訳している。そしてアルチアスが手紙を見ずに懐にしまい込んだのを「誰料他罪惡貫盈。應該敗事。（まさに悪行の限りを尽くし失敗する運命とは誰が予測したのでしょうか。）」と解説を入れている。ここは完全に白話小説の説書人の口調を故意に真似たのであり、アルチアスが手紙を見なかったのは因果応報であると解説を入れているのである。このように小説の記述部分に「説書人」の語り口を入れるのは全体に及んでいる。

他もみてみよう。小説のはじまりの場面に、正党ペロピダズがアテネへの亡命中に敵襲に遭い、河へ落ちて漁夫に助けられる場面がある。年老いた両親を気遣う息子に向かって、息子の父はペロピダズを助けてアテネまで船で送り届けるように説得をする。その漁夫の科白の後に、日本語にはない「看官聽說。這齊武の郷民也知愛國也。曉得自己有為國的職分。所以興盛的緣故。即在這些上面。這却不表。（『清議報』第三十九冊）（皆さま、テーベの民衆も愛國を知っているのです。自分も国のための職分があることをわかっているのです。繁栄しているのはまさにそのためです。これはここでは言いません。）」という言葉が加わっている。これはまさに当時の知識人の心境そのものである。

注意すべきなのは、小説中に顔を出す語り手は旧白話小説の説話人の口調そのものであるが、内容は訳者も含めた知識人の心情の代弁となっているところである。次の部分はそれを如実に表している。亡命先のアテネの公堂にて、メロンはアテネ市民に向かいテーベへの援助を願い出て

演説を行う場面がある。アテネ市民は言葉に詰まって「テーベを救いたまえ」と連呼する豪傑のメロンの滑稽な様子を見て、声を立てて笑い始める。そこに亡ったはずのペロピデスが突然会場に現れる。メロンは我が目を疑いながら、ペロピデスの名を呼びつつ近づくが、ペロピデスは詳細はアルティアスに聞けと言いつつ残り残して演説台に登った。その登場場面を原著では「巴比陀ハ言葉短ク瑪留ニ其ノ身ノ死セザリシヲ告ゲ尚ホ委細ハ安氏ヨリ聞ク可シトテ瑪留ヲバ安氏ニ託シ今阿善人民ニ訴フ可キ此ノ好機会ヲ失フベカラズト思ヒケレバ疾ク進ンテ発言台ノ下ニ至リ会衆ニ向ツテ明亮ナル音声ヲ発シ發言ノ許シヲ請フテ曰ク（『経国美談』第五回）」とある。中国語訳では「這瑪留到巴比陀面前。與巴比陀安度俱相見了。便在会堂上高声問道。你到底還沒死麼。巴比陀方欲告訴他。倒是安度俱道。剛纔兄長在發言台上。把齊武出醜極了。我們若被他們看輕了。回復的事。還有望麼。請快些上發言台。說個道理。求他援助。何必在這裏私講甚麼。巴比陀以為然。即对着会衆發言道。（『清議報』第四十冊）（メロンはペロピデスの目前に来て、ペロピデスとアルティアスと会い、会堂で大声で尋ねた。君はやはりまだ死んではいなかったのか。ペロピデスが彼に答えようとする、アルティアスの方が言った。さっき発言台で兄貴がテーベの恥を晒したところです。もし彼等に軽く見られたら、政権回復の事を望むことができますか。早く発言台上り、道理を説いて、彼等に援助を求めて下さい。ここでこそ何を話しているのです。ペロピデスはその通りだと思い、すぐに聴衆へ向かって発言しはじめた。）」とアルティアスがメロンの恥を戒める言葉が挿入されており、ここに訳者の心情が思わず吐露されている。

このペロピダスの演説はアテネ市民の心を揺り動かしたのだが、結局アテネの奸党の妨害に遭い、執政官会議においてテーベへの援助は否決されてしまう。テーベ亡命の志士達は落胆をしながら次策を練る。ここに中国語訳に日本語原書にはない「看官聽說。天下有許多没用的人。一經挫折或忍耐至再至三。即意冷心灰。不是醇酒婦人。便是斂手坐待。不是終日嘆息。便是滿腹牢騷。到底仍是無成。挫折還是被人挫折了。看巴比陀他們。国内遇了对頭。跑到他国。又遇了晦氣。此回之後。還遇了種種苦難。源源而來。層層相逼。他們仍是如常。豪不介意。所以苦盡甘來。終要成功。這不畏阻力。便是他們過人処所。便是他們定要成功的左券。（『清議報』第四十一冊）（皆さま、天下には多くの役立たずがいます。一回挫折したり、二三回我慢しただけで、気持ち冷めてしまうのです。酒と女でなければ、手を拱いて待つだけ。一日中溜息をつくのでなければ、不満愚痴だらけ。やがて何にもならない。挫折したことには変わりなく、人に挫折させられたのである。ペロピデス等を見てみなさい。国内で敵にぶつかり、他国に逃げ、また不運に遇った。この回後も種々の苦難に遇い、絶えずやってきてはますます追い詰められるが、彼等は依然としてそのまま全く気に留めていません。そこで苦を尽すと甘が来て、終に成功するのです。この障害を畏れないのは彼等が人より勝っているところで、彼等が必ず成功する証なのです。）」という解釈を加えられている。ここには、テーベから亡命の志士達が中国から逃れて日本の地で改革を目指す彼等の立場と同一化されており、語り手がそれを代弁している。

「佳人之奇遇」において東海散士をはじめとする人物達は、弱小国の知識人である自らの代弁者でもあった。そして弱小国である中国が西欧列強に侵されていくその視点は、日本の知識人ひいては世界の弱い国の志士達と共有されていた。しかし「経国美談」において登場人物である志士達はあくまでも小説世界である一つの役割を演じる役者に過ぎず、訳者が自らの思想を述べるのは「語り」の部分である。訳者は小説の語りの部分を借りて、重要であると思われる時には表に顔を出して解説を加え、自らの境遇と照らし合わせて感嘆する。「経国美談」において、訳者

は「佳人之奇遇」のように人物を借りて思想を主張しようとはせず、むしろ語り手を借りて主張している。

これまで、「経国美談」のように清末小説が旧章回小説体をとっていたのは、近代小説形式に対する認識がまだ未熟であったという解釈されることが多かった。しかしここから近代小説形式に対する認識不足というより、むしろ翻訳者が自らの価値をどのようなかたちで小説形式に反映したのかということと翻訳方法が関係しているのがわかる。この「経国美談」の訳者は読者対象として民衆を念頭におき、彼らの読解能力を想定して翻訳方法を選択している。そこからは、矢野龍溪の正史への拘りからくる叙述方法を強く否定し、逆に小説形式の通俗性を利用して自らのイデオロギーをより効果的に民衆へ浸透される方法を打ち出そうとする姿勢がみられる。そのため、この「経国美談」の翻訳は旧章回小説の模倣というだけではなく、清末の知識人達が小説形式の通俗性に着目してそれを利用しようと試みた産物と考えることができるのである。

#### 第四節 「理想派」と「写実派」：啓蒙の二つのかたち

一八九八年に梁啓超は「訳印政治小説序」において康有為の言葉を引用し、小説形式の通俗性には啓蒙の効用があると述べている。しかし一九〇二年、梁啓超は「論小説與群治之關係」において当時一般的だった通俗性を利用した小説効用論に対して、民衆が小説を好む理由は通俗性、娯楽性のみで論じるのは不可能であると否定している。「論小説與群治之關係」は『新小説』の発刊の辞に掲載されたもので、『清議報』に訳載された「佳人之奇遇」や「経国美談」の経験を土台にして、小説に対する考えをより一歩深化させたものである。

「論小説與群治之關係」において次のように述べている。小説が娯楽性や通俗性を超えて民衆を魅了するその原因はどこにあるのだろうか。その一つの原因は人間が持つ本質的な性質、「凡人之性、常非能以現境界而自満足者也。（凡そ人の性は、常に能く現境界を以て自ら満足する者にあらざるなり。）」にある。人間には現実世界を抜け出し、別次元の世界を求める欲望がある。その欲望を満たすために、現実世界を超えた別境地に心を遊ばせることのできる小説を読むのである。もう一つの原因は人間は自ら体験する世界の本質的な意味を知りたいという欲望をもっているために小説を読む。梁啓超にとって小説とは変革のための小説であり、中国民衆の意識を近代化に導くためのものでなくてはならなかった。そして現実体制変革を欲する動機は民衆心理のなかには既に存在しており、それを上手く利用して導きさえすれば啓蒙は果たせるという考え方をしていたのである。

この論の立て方は非常に独特であり、小説の価値をただ単に通俗性、娯楽性のみから捉える考え方と一線を画している。そして、この民衆の潜在的にひそむ欲望を表現した小説をここでは「理想派小説」と「写実派小説」の二つに分類している。この「理想派」と「写実派」の分類法は清末から五四時期以前までの文芸評論に大きな影響力をもっていた。ここで用いられている「理想」とは「政治的理想」という意味を含みながらも、基本的には「写実」と対応する「空想」の意味で用いられている<sup>36)</sup>。梁啓超は当時の日本文芸理論の影響を受けながら、彼独自に実際の翻訳経験を通して考えを深めていったのではないかと思われる。

具体的には、「理想派小説」の効用は先述したように人が現実を超えて別境界に彷徨うことによって感化を果たす小説を指している。これは民衆感化の第一歩である。このような効能は脚色、つまり背景設定にイデオロギーを載せることで完成すると考えているのではないと思われる。例えば「経国美談」のような小説である。原著の「経国美談」の序にも「唯身自ラ遭ヒ易カラサルノ別天地ヲ作為シ卷ヲ開クノ人ヲシテ苦楽ノ夢境ニ遊ハシムルモノ是レ則チ稗史小説ノ本色ノミ。故ニ稗史小説ノ世ニ於ケルハ音楽画図ノ諸美術ト一般、尋常遊戯ノ具ニ過キサルノミ。」という言葉がみられる。ここから矢野龍溪は小説が娯楽に過ぎないと論を展開していくが、梁啓超の論では小説の別天地に誘う力こそが小説の感化力の根源であるという風に変えられている。

清末の翻訳は基本的にこの「経国美談」の手法に倣っている作品が多い。例えば、科学小説の翻訳などは典型的な例であり、魯迅もこれらの小説を翻訳するときに「佳人奇遇」ではなく、むしろ「経国美談」の手法を翻訳方法として採用している。小説世界に読者を引き込むためには、「佳人奇遇」のような議論ではなく、小説の特質である具体性、形象性を活かさなければならない。当時の知識人が参照としたのが伝統的な白話小説であったのは必然的結果であった。

これに対し、「写実派小説」とは次のように述べている。

無論為哀為樂。為怨為怒。為恋為駭。為憂為慚。常若知其然而不知其所以然。欲摹写其情状。而心不能自喻。口不能自宣。筆不能自伝。有人焉和盤託出。徹底而発露之。則拍案叫絶曰『善哉善哉。如是如是』（『新小説』第一号）

（哀をなし樂をなし、怨をなし怒をなし、恋をなし駭をなし、憂をなし慚をなすを論ぜず、常にその然を知るといへどもその然なる所以を知らざるが若し。其の情状を摹写せんと欲せども、心はよく自ら喩うるあたわず、口はよく自ら宣ぶるあたわず、筆はよく自ら伝うる能わず。人有りて和盤託出して、之を徹底して発露すれば、則ち拍案叫絶して曰く。善いかな善いかな、是の如し是の如し。）

人が現実世界において経験した出来事が全体的世界のなかでどのような意味をもつのか、人は自分でもよくわからない時がある。しかしその意味を的確に説明する者さえいれば、「拍案叫絶」して深く感銘を受けるのである。

ここで用いられている「拍案」という言葉は、梁啓超の書いた史伝やまた「佳人之奇遇」などのなかでもみられる言葉であり、政治的な共感の意味を含んでいる。「佳人之奇遇」のなかではこのような場面で用いられている。散士が自己の政治的信念をアラビー・バシヤの拳兵檄文に見出した反応が「散士朗読再三案ヲ拍テ曰ク、壯快ノ文ナリ（『佳人之奇遇』第六巻）」とある<sup>37)</sup>。ここではただ単に感嘆するという意味に用いられているのではなく、相手の意見に対する強い共感を表す言葉として用いられている。「佳人奇遇」の人物たちは独立して個性を持っている人物ではなく、ある世界観の代弁者である。読者は現実世界と照らしあわせて自らの体験の意味を人物達の科白から読み取るのである。

梁啓超の「写実派小説」の考え方は言うまでもなく啓蒙の小説観から出発している。「写実派小説」とはただ単に現実世界を写実する小説という意味ではなく、むしろ小説に含まれる認識（イデオロギー）が現実世界よりも先行し、民衆に現実の意味を示唆し教えるような小説を「写実



派小説」と呼んでいるのである。

このように小説に織り込まれた思想は「種」として民衆の心のなかに根付いて、小説世界で身につけた考え方を逆に現実世界の解釈へと転化し、啓蒙が完成する。梁啓超はその小説の力を四種類の力「薫」、「浸」、「刺」、「提」と呼んでいる。「薫」とは、人を知らず知らずのうちに感化する力のことをいう。この力が人に影響を与えると考えの「種」のような核を形成する。その「種」は社会に遍く広がっていく。「浸」も同様に感化の力であるが、人に対する時間的な影響力を指している。また、人がまるで憑かれたように小説世界に入り込み感情移入をすることを「刺」といい、その時に読者が主人公に同一化する作用を「提」と呼んでいる。「薫」、「浸」とは小説がどのようにして社会を変えるかという点から述べられており、「刺」、「提」とは人がどのようにして小説世界へ感情移入するかについて論じている。人々は小説世界へ感情移入をしてどっぷりと浸りこむと、小説世界を現実世界のように感じる。小説の描き出す世界をヴァーチャリアリティのように感じることによって啓蒙は果たせるのであり、それこそが虚構が事実を書いた史とは異なる価値を持っていると梁啓超は続けている。

このように、梁啓超は事実と虚構の関係に斬新な観点を提出した。以前の伝統的な小説観において空想によって作られる物語は「猥鄙荒誕」で「徒らに耳目を乱す者」として退けられたのであるが、梁啓超は「論小説與群治之關係」において初めて事実と虚構の価値を転倒して理論的に論じたのである。小説の価値は事実に基づいていることにあるわけではない。小説が事実より勝るのは小説の内包するイデオロギーにあり、小説に含まれるイデオロギー（認識）が人々の現実認識に先行してこそ啓蒙することができる。このような小説の写実性とイデオロギーに関する明確な自覚は、かつて中国にない認識であった。そしてこの小説のイデオロギーの関連に対する自覚こそが小説の近代性の自覚へと繋がっていったのである。

五四以降に西洋の文芸理論が受容され、現実をそのままに描写することを主義とする「リアリズム（写実主義・現実主義）」が小説の主流を占めるようになる。しかしリアリズム小説の裏には、清末時期から受け継がれた「写実派小説」の啓蒙的文学感が脈々と息づいている。つまり、小説によって現実を描くことの本質的意義は事実をそのまま描くことにあるのではなく、小説に含まれた現実に対する認識を民衆に教えるためであるという考え方である。そして、このような啓蒙的文学観こそが五四以降リアリズム小説を中国において主流たらしめた原因となったのである。

#### 注

- 1) 前野直彬「明清の小説論における二つの極点」『日本中国学会報』第十集、一九五八年
- 2) 康有為『『日本書目志』識語』『日本書目志』上海大同訳書、一八九七年
- 3) 巖復、夏曾佑「本館附印説部縁起」『国聞報』光緒二十三年（一八九七年）十月十六日至十日
- 4) 「小説」という言葉が今日と同様の意味で用いられるようになったのは、清末の知識人に端を発していると思われる。それは日本の「小説」という言葉を中国に逆輸入するかたちで用い、次第に定着していったと考えられる。日本においても「小説」という名称が一般的に用いられるようになるのもそれほど昔からではない。江戸時代に及んでも一般的に用いられることは珍しく、明治以後になって漸く定着していく。明治三年、西周は『百学連環』の第一編のなかで Romance を稗史、Fable を小説と訳しており、明治十二年に至ってもきわめて稀に「欧州小説」という角書が見えるぐらいである。下で論じる「経国美談」序には「稗史」と「小説」が並列して見られ、「佳人之奇遇」序にも「稗史」

という言葉が用いられているが、われわれが現在「小説」という言葉に与えている概念が本格的に定着するのはやはり明治十八年に出版された坪内逍遙の『小説神髓』以降である。日本の明治十八年はちょうど中国の光緒十二年に当たっているので、「本館附印説部縁起」が書かれたのは光緒二十三年であり、同じく康有為「日本書目志識語」も光緒二十三年であり、既に明治十八年から十年余り後であり、この頃の日本では小説という言葉は既に一般化していた。清末において「説部」、「稗史」となどと並んで「小説」という言葉は一般的に用いられおり、清末の識語や文論における「小説」という言葉は既に巷の逸聞を集めた書物などを指す伝統的な意味ではなく、現在我々が用いている西洋のフィクションの訳語として用いていた。中国の文芸評論においても、このように「小説」という名称とその名称に含まれる概念が現在の意味で定着するのは小説に対する近代的な意識が定着する過程と対応していると思われる。（「総説」『近代文学評論体系・第一巻・明治期Ⅰ』角川書店、昭和四十六年十月、四六六頁参照）

- 5) 陳平原『中国小説叙事模式的轉變』上海人民出版社、一九八八年三月
- 6) 陳平原「前言」（陳平原、夏曉虹編『二十世紀中国小説理論資料（第一巻）』北京大学出版社、一九九七年、四頁）
- 7) 東海散士「佳人之奇遇」全八冊十六卷、博文堂、一八八六年～一八九八年。初編は明治十八年十月、式編は明治十九年一月、參編は明治二十年二月、四編は明治二十一年三月、五編は明治二十四年十二月、六編は三十年七月、七編は三十年九月、八編は三十年十月に出版された。
- 8) 柴四郎の経歴については、柳田泉「『佳人之奇遇』と東海散士」（『政治小説研究（上）』春秋社、一九六七年八月所収）が詳しい。また「佳人之奇遇」の成立については、柳田泉「『佳人之奇遇』の成立」（前掲書『政治小説研究（上）』所収、三七二頁～三七三頁）を参照。
- 9) 前田愛「明治歴史文学の原像」（『展望』二一三号、一九七六年、一一九頁）に「会津人柴五郎の遺書」（石光真清編『或る明治人の記録』）が引用されており、その本は柴四郎の弟である柴五郎の遺書であり、下北半島に放逐された時代の困窮の日々についての記載がある。
- 10) 前掲「明治歴史文学の原像」一一六頁
- 11) 前掲「明治歴史文学の原像」一一三頁～一一六頁参照
- 12) 前掲「明治歴史文学の原像」一一五頁
- 13) ドン・カルロス党が起こしたカルリスタの反乱とはフェルナンド七世の王位継承問題に端を発している。イザベル二世は夫であるフェルナンド七世の後を継いで王位に就いた。しかし、王弟のドン・カルロスはこの王位継承を巡り、カルリスタ戦争を起こすが、これが失敗に終わる。その後、一八六八年に失政のためにスペイン革命が起こり、イザベル二世は王位を追われ、このイザベル二世の退位後に共和党政権が樹立される。この時、王位継承の正統性を主張していたドン・カルロスの息子を父の意志を継いで王位に就かせて、立憲君主制を樹立しようとしたのが幽蘭の父が率いる第二次カルリスタの革命である。
- 14) 中国語訳『佳人奇遇』の翻訳者については、梁啓超と羅普の二通りの説がある。翻訳者が誰であるかについては多くの論考があるが、李慶国「清末における政治小説の考察（一）」（『アジア文化学科年報』第一号、一九九八年）においてそれ以前の論考をまとめて紹介している。それによると、『飲氷室合集』第十九冊（上海中華書局、一九三二年）に「任公先生戊戌出亡、東渡日本舟中訳此自遣、不署名氏」という注釈があり、また一九九〇年に梁啓超が書いた『紀事二十四首』に「曩訳佳人奇遇成、每生遊想涉空冥、從今不羨柴東海、枉被多情惹薄情」（『梁啓超詩詞全注』、広東高等教育出版社、一九九八年九月所収）があり、これが梁啓超翻訳説の根拠になっていると説明している。また、梁啓超が翻訳したという説を取っている論者は、まだ日本に来て間もない梁啓超に日本語を翻訳する能力があったか否かについて、日本語原書が漢文体であったために可能であったと主張している。これに対し、羅普翻訳説は「字孝高。嘗在清議報訳述日人柴四郎著佳人奇遇一書」（馮自由「興中会時期之革命同志」『革命逸史』第三集、中華書局、一九八一年所収）、及び「此書叙述欧美各滅亡国家志士及中国遺民謀光復故土事。日人柴四郎著、由羅普分期訳載清議報、有単行本。惟關於中国志士反抗滿虜

- 一節、為康有為強刪去」（馮自由「開国前海内外革命書報一覽」『革命逸史』第三集，中華書局，一九八一年所収）に拠っている。また羅普説の論者は全く日本語ができなかった梁啓超が翻訳する事は不可能であると考え。これらの文献を参照すると、現在においてどちらが翻訳したのかについて、筆者は決定的な証拠となる文献がないと考える。そこで梁啓超が翻訳の際に羅普に大きな助けを借りて訳したか、梁啓超の影響を受けて羅普が翻訳したかを論考において明確に論ずることはできないが、作品の選択や翻訳方法などについては梁啓超が選択したものであろうと考える。
- 15) 『清議報』に訳載されたのは原著の第十二巻の頭までである。原著は全十六巻であるが、それ以後の部分は訳されていない。なぜ途中までで訳を中断してしまったのかその理由は不明である。大村益夫「梁啓超および『佳人之奇遇』（『人文論集』十一集，一九七四年）において、その理由について推測しており、当時梁啓超が多忙を極めていたことと一つの作品への興味が持続できなかったことを挙げている。
- 16) 許常安「『清議報』登載の『佳人奇遇』について——特にその改削」『大正大学研究紀要』五十七集，一九七二年
- 17) 許常安「清議報第四冊訳載の『佳人奇遇』について」『日本中国学会報』第二十四集，一九七二年
- 18) 前掲，許常安「清議報第四冊訳載の『佳人奇遇』について」二〇一頁
- 19) 許常安「上海中国書局印行と清議報訳載の『佳人奇遇』を比較して——特にその名訳と誤植訂正——第一篇」（『斯文』第七八号，一九七五年）において、この清議報訳載の『佳人奇遇』がどのような点において名訳であるかについて例を挙げて詳細に論じている。
- 20) 陳平原「前言」（前掲書『二十世紀中国小説理論資料（第一巻）』六頁）
- 21) 『龍溪矢野文雄伝』において、龍溪が発行禁止に至らないように生々しい英仏の革命史を潤色するよりはむしろギリシア史を潤色するほうがいと述べていたとの記述がある（『明治政治小説集：日本近代文学大系二』角川書店，一九七四年三月，補注六三，四五〇頁）。
- 22) 前掲書『明治政治小説集：日本近代文学大系二』注一，一八二頁参照。
- 23) 第四回の公会堂における議論で奸党が「国勢ノ強大ヲ冀ハハ何ゾ強盛ナル斯波多ノ如ク寡人専制ノ政体ヲ採用セザルゾ」と論じる部分があるが、この「寡人専制ノ政体」とは日本の状況に照らし合わせると、薩長藩閥とのアナロジーとなっていると述べている（前掲書『明治政治小説集：日本近代文学大系二』注三，一九四頁）。鳴鶴の第二回評に「叙事中往々雑議論。以示作者本意所在。不須漫然読去。（叙事中に往々にして議論雑る。以て作者の本意の在る所を示す。須らく漫然と読み去るべからず。）」という指摘があり、小説中の描写によって日本の政治情勢が暗示していることを指摘している。
- 24) 第六回にエバミノンダスがアテネの名士を尋ねて援助を乞う場面において、嘗てのアテネの国難を名士に思い起させて援助を約束する場面がある。そのアテネの名士の様子を「総テ自由主義ノ人ハ人民ノ幸福ヲ以テ其心トナスガ故ニ人民ノ不幸ヲ憫ムノ情ニ厚クシテ假令ヒ他国ノコトナリトモ人民ノ不幸ヲ見ルトキハ之ヲ救ハント欲スルノ情自ラ止ムコト能ハサルニ因ルナリ。」とあり、改進黨の趣意書に「王室ノ尊栄ト人民ノ幸福ハ我党ノ深く冀望スル所ナリ」を踏まえているという（前掲書『明治政治小説集：日本近代文学大系二』注七，二一一頁参照）。
- 25) 「而シテ齊武ノ政体ハ旧来ヨリ共和ノ民政ニテ其ノ制度ハ多ク阿善ニ倣ヒ其ノ人民ハ壯武ニシテ徳義ヲ重シ且ツ阿善ニ近接スルノ地位ニ在ルガ故ニ文物典章モ亦タ頗ル開ケタリ」（『経国美談』第二回）と書かれているが、実際は紀元前四五六年にオイノピュタの戦いの時にはテーベの民主政は既に崩壊していたとの指摘がある（前掲書『明治政治小説集：日本近代文学大系二』注二二，一八一頁）
- 26) ペロポネソス戦役は、テーベがアテネ方のプラターエーに加えた攻撃から始まったのであり、テーベは終始スパルタの盟邦であった。龍溪はテーベの仇敵としてスパルタの役割を強調するために、この事実を伏せたものと思われる（前掲書『明治政治小説集：日本近代文学大系二』注二三，一八一頁）

- 27) 矢野龍溪が正史重視の姿勢をとりながらも、本論中で述べたように史実を故意に隠蔽している、もしくは史実の足りない部分を想像力によって補っている部分も多々みられる。この事について、「『経国美談』の序文や凡例にある正史・実事尊重の姿勢は、龍溪のタテマエと受けとめるべきであり、龍溪自身は、正史を離れた虚構の部分において、彼の想像力を飛翔させることに『経国美談』述作の意義を求めていたという説がある（前掲書『明治政治小説集：日本近代文学大系二』補注六二，四五〇頁）。矢野龍溪が小説中において史実に悖る出来事を正史の叙述方法でもって描いているのは唯単に建前としてだけでなく、当時の小説蔑視の風潮と正統な小説観の枠組みのなかで、知識人に如何に受け入れられるようにすればいいかという工夫ともみなせるのではないと思われる。
- 28) 例えば藤田鳴鶴の評は小説の内容だけでなく、構成にまで及んでいる。第一回評に「藤田鳴鶴云。開巻。先叙老教師演説。述阿善賢君義士愛国殉難之蹟。暗々裏呼起後段斉武国難。又云。三個童児。是巻中骨髓。其感激之語。発露三人有三様性格。而語気自然為後年三士立功之伏線。又云。一演説。大有関係於全篇。結構極妙。唯末節明示児童為何人。是実写矣。不如使此回全虚写。作者意如何。（藤田鳴鶴云く。巻を開けるに、先ず老教師の演説を叙す。阿善賢君義士の愛国殉難の蹟を述ぶ。暗々裏に後段の斉武の国難を呼び起す。又云く。三個童児は、是れ巻中の骨髓なり。其の感激の語は、三人に三様の性格が有るを發露す。語気自然にして後年の三士立功の伏線と為す。又云く。一演説は、大いに全篇に於いて関係有り。結構は極めて妙なり。唯だ末節に児童の何人為るかを明示するは、是れ実写なり。此回をして全て虚写するに如かず。作者の意は如何。）」と述べている。これは第一回で後にテーベの英雄となる三人の少年達が老教師から過去の事跡を聞される小説の初めの部分についての評したものである。評では少年たちが聞く物語中に過去の愛国義士の受難が語られ、それが小説のストーリーの伏線となっており、彼らの歴史事実に対する反応が成人後の性格を暗示していると指摘している。そして最後にこの三人の児童が何者かを明かさないうまにしておき、この始まりの部分が全て虚構のままであった方がよかったのではないかと述べている。また前編最後の第二十回評に、「鳴鶴云。（略）全篇結構之精密。筆力之縦横。固不待論。若夫不枉正史。統貫以実蹟。呈這奇観。実は傑作。是書不伍尋常小説者。則在此。（鳴鶴云く。（略）全篇結構之精密。筆力之縦横。固より論を待たず。若し夫れ正史を枉げずして、実蹟を以て統て貫き、這の奇観を呈するは、實に是れ傑作なり。是の書が尋常の小説に伍ざるは、則ち此に在り。」と、小説構成の精密さを褒めている。このような構成上の緊密さは中国語訳には見られない。
- 29) 矢野龍溪は小説を構成する際に中国の「水滸伝」、馬琴「里見八犬伝」などの小説を参考として場面構成などをしており、馬琴「稗史七則」の「照応」という手法なども用いていた。（前掲書『明治政治小説集：日本近代文学大系二』注三，一九二頁）
- 30) 斎藤希史「〈小説〉の冒険」（『人文学報』六十九号，一九九一年）参照
- 31) 『経国美談』後編自序において、著者矢野龍溪は「余輩応ニ斯ノ如クナル可ラスト是ヨリ以後復タ漢文ヲ以テ時文ヲ褒貶スルヲ止メ勉メテ完全ナル時文ヲ作ラント欲スルノ志ヲ生シタリ」と述べている。ここでいう時文とは四種類あり、漢文、和文、俗文、欧文直訳体であるという。この四体の文体はそれぞれに特徴を持っており、その特徴に合った用い方をすると非常に便利であると述べている。
- 32) 柳田泉「政治小説の文体と発想」（『国文学解釈と鑑賞』二十八（十一），一九六三年）において、政治小説の文体について当時の時代小説において革新的文体であったことを指摘しており、「経国美談」が小説文体革新論の第一声をあげたことは注意するに値すると述べている。
- 33) 斎藤希史「〈小説〉の冒険」（前掲『人文学報』）十三頁～十八頁参照。
- 34) 前掲書『明治政治小説集：日本近代文学大系二』注十八，三〇九頁
- 35) 他にも『経国美談』第十八回に、正党人士がいよいよクーデターを執行しようとする日を紀元前三百七十九年十二月十一日と日付まではっきりと書いているが、史書には「十二月ごろ」とのみになっている（前掲書『明治政治小説集：日本近代文学大系二』注三，二九二頁）。
- 36) 胡適も「論短篇小説」（『新青年』第四卷第四号，一九一八年）においてこの二通りの分類方法を用いているが、やはり「理想」を空想の意味で用いている。五四以降に西洋の文芸理論書が広く読まれ

るようになってから定着するロマンティズムとリアリズムの二つの分類方法とよく似ているが、この時期にはまだその分類方法がなされてなかった。

- 37) マッジニーの新協会の目的を語る科白に『『教育と暴動とを同時に行う』にありと云うに至っては其の連結の奇なる、然も時に処するの活識ある人をして案を拍て三嘆せしむ。(平田久纂訳『伊太利建国三傑』民友社、一八九二年、三十二頁)』とあり、ここも同様の場面において用いられている。また、李慶国「清末における政治小説の考察(一)(前掲)」のなかに、復臨室主人「今日の国難を救い、弱国から強国になる方法を探求しているところで、偶然『佳人之奇遇』に出会い、その内容を繰り返し考えて、思わず机を敲いて素晴らしさを盛賛した。曰く、これは今日の中国人の心を改造する良薬である(鄭振環『影響中国近代社会百種訳作』中国对外翻訳出版公司、一九九六年)」と、当時の中国人が「佳人之奇遇」を読んだときの感想を引用しているが、どのような時にこの「拍案」という言葉を用いたのかが如実に示されている例と思われる。
- 38) この「論小説與群治之關係」は当時日本の文芸理論の影響を受けたものと思われる。例えば、『日本立憲政黨新聞』(明治十六年六月九日)に掲載された「我国ニ自由ノ種子ヲ播殖スル一手段ハ稗史戯曲等ノ類ヲ改良スルニ在リ」には「則チ我国人ノ腦力ハ專制ノ弊習ニ支配セラレテ其自由幸福ノ美味アルコトヲ耳ニスルハ実ニ僅々廿年来ノコトニテ其種子ノ外国ヨリ伝来シタルコトハ日尚淺ケレバナリ左レバ我国ニハ元来自由ノ種子ハ絶エテアラザリシニ社会ノ大勢ノ然ラシムル所ニヨリテ夫ノ外国ヨリ伝来シタル種子ヲバ日ニ月ニ播殖培養シ以テ我国ヲシテ自由ノ樂園トナサシメント其志気アル者ハ卒先シテ百万其事ニ尽力スルニ至リタルハ誠ニ我国家ノ為メニ賀ス可キコトニゾアル」とあり、この文献を直接的に梁啓超が目を通したかは定かではないが、当時の言論に「種子」が空間的に拡大するという考えが存在していたことが伺える。また、この文章には「我社会ノ改良ヲ謀ラントスルニハ必ズ幼児ヲ始メ婦女下流者流ヲ薰和シ以テ彼ノ專制ノ習氣ヲ洗淨シ卑屈ノ根性ヲ感化シテ活発ナル自由ノ気力ヲ英發興起セシメザル可カラザルナリ而シテ其之ヲ英發興起セシメント欲スルニ於テハ先ヅ我俗間ニ行ハルル所ノ稗史戯曲等ノ類ヲ改良スルコトヲ企図セザル可カラズ」という言葉もある。ただ、梁啓超の文章は多くの文章を寄せ集めて参考にして構成したと思われ、決定的な一つの藍本があるとは思えない。